

文協甲府



「こうふ亀屋座」槌音高く

～ 目 次 ～

◇発行のことば 会長 樋口 雄一 …… 2	・展示・発表の部 …… 26～37
◇甲府市教育委員会 教育長 松田 昌樹 …… 3	・開幕式・私の地域 歴史探訪・表彰式 …… 38
◇副会長 …… 3	◇事務局から …… 39
◇専門部から …… 4～9	・令和6年度定期総会 …… 39
◇地区文協から …… 9～16	・文化講演会 …… 39
◇第50回 甲府市民文化祭 …… 17～38	◇甲府市文化協会 顧問・役員氏名 …… 40
・特別出品 …… 19	◇あしがき …… 40
・文化祭賞・文化祭奨励賞 …… 20～25	

銘【拓】タク・ひらく

甲府市文化協会

会長 樋口 雄一



私は今年一年の思いを表す漢字を「拓（タク）」としました。

「拓（タク）」は、「ひらく」とも読み、開拓や拓殖、新たな道を切り開く、あるいは、土地を整え、利用できるようにするという意味があります。

今年は、かねてより整備を進めてまいりました、甲府城南側の歴史文化 交流施設「こうふ亀屋座」等が四月のオープンを控えており、また、遊亀公園 附属動物園のリニューアルやリニア新駅の周辺整備など、まちの魅力を高め、新たな価値を創造する様々な事業が、着実に進捗しています。

こうした歩みを止めることなく、本市の限らない発展のため、「KOFU NEXT ACTION」を積極果敢に推し進めるとともに、絶えず挑戦を続け、故郷こうふの輝かしい未来を「拓く」という決意を込めて、「拓（タク）」という漢字を選びました。

発行のことば

やわらかな日ざしが心地よく、春の訪れを感じる季節となりました。

平素より、甲府市文化協会の役員各位をはじめ、会員の皆様方におかれましては、本協会の円滑な運営並びに本市の文化振興に多大なご尽力をいただき、改めて深い敬意と感謝の意を表する次第であります。

さて、昨秋開催した市民文化祭では、会員の皆様の日頃の研鑽の成果となる作品展示や発表を通じて、多くの皆様に、文化芸術の魅力を満喫いただくとともに、五十回という節目の文化祭として、様々な特別企画を実施いたしました。展示部門では、展示会場で合奏を行うなど、展示と発表のコラボレーションや、新たに高校生の作品展示も行いました。発表部門では、参加団体が甲府の春夏秋冬を一つの物語として紡いでいく企画演出をはじめ、前回、好評であった高校生の部のほか、新たに大学生・社会人の部など、若い躍動感ある発表を披露していただき、文化が未来

に繋がる希望を与えるものとなったと感じております。

そして、この度、会員の皆様から寄せられました、一年間の文化芸術活動等をまとめた機関誌「文協甲府第四十六号」を発行する運びとなりました。これからの文化活動を推進していくうえで、ご活用いただくとともに、これまで活動を自粛していた皆様にも手に取っていただき、活発な文化活動を再開してもらえれば幸いに思います。

今後におきましても、文化芸術活動を通じて、市民間交流を深め、本市の重層的で多様な歴史や伝統、文化を次世代に引き継いでいけるよう、鋭意取り組んでまいりますので、引き続き、皆様方のお力添えを賜りますようお願いいたします。

結びに、本市文化芸術の更なる発展を願いますとともに、会員の皆様、益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

「文協甲府」発刊に寄せて



甲府市教育委員会
教育長 松田 昌樹

春の訪れとともに、私たちの心にも温かな光が注ぎ込まれる季節となりました。

甲府市文化協会並びに関係各位の皆様におかれましては、日頃から本市の文化芸術の振興にご尽力をいただき、誠にありがとうございます。

この度の市民文化祭では、「築いた歴史 輝く成果 更に未来に」というテーマのもと、これまで皆様の日々温め、育て上げた文化の輪がより一層広がるとともに、磨き上げた作品が更なる輝きを放ちました。

昭和、平成、そして令和という時代の流れの中で、我々の文化はさまざまな変遷を経ながら形成され、迎えた記念すべき第五十回と言う節目は、長年にわたって甲府市文化協会の皆様が培われてこられた

研鑽と実績の結晶であります。

そして、この歴史や輝かしい成果が「文協甲府 第四十六号」として結実し、発刊されますことは誠に喜ばしいことであり、文化の継承の証として本冊子が発刊されますことを心よりお祝い申し上げます。

本市教育委員会といたしましても、今後も文化芸術発展のため甲府の文化を磨き上げ、輝く未来を皆様とともに共有し、後世へと継承していく取り組みを行って参る所存です。結びに、本冊子の制作にあたりご尽力いただきました編集委員の皆様、心からの敬意と感謝を申し上げますとともに、甲府市文化協会の更なるご発展を心よりお祈り申し上げます。発刊に寄せての挨拶いたします。

文化活動について



副会長 数野 徳子

甲府市制百周年につくられた交響組曲「遙かなる時を超えて」が第五十回市民文化祭特別企画の発表会で甦りました。総勢八十三名の皆様方の力強い合唱はなんとも圧巻で、文化活動を継続していくことの大切さを身に染みて感じる事ができました。

市民文化祭の最後には、八校の高校生によるダイナミックなダンス、吹奏楽、応援団等の発表もありました。若い人たちの活動が、明るく希望に満ちた社会をつくっていく原動力となります。すよう、願わずにはいられません。

私は詩作を行っています。甲府詩人会会員として市民文化祭に初めて出展してから二十四年になりますが、まだまだ未熟です。しかし拙い詩作であっても、それが私の文化活動と

位置付けているので、誰かに読んでいただければ喜びも増します。

原点にあるのは、少しでも豊かな人生を送りたいという気持ちで、日々の暮らしの中に詩を書く時間を取り入れています。近年の緊迫した世界情勢の中にあっても、市民文化祭を続けていける幸せを噛みしめていきたいものです。

先日、「核の記憶 創作でつなぐ 被団協代表委員（元山梨大学学長）の孫に使命感」という記事が新聞に載りました。核廃絶への決意を新たにしたい被爆者のお孫さんが、「核と人間」をテーマにした作品の制作に打ち込んでいるのです。こうした取組みを大切に、みんなで支えていけるよう、文化活動の輪を広げていきたいと考えています。

専門部から

今後の文化祭発表部門の

あり方について

吟剣詩舞道部

風間 勲

十一月九日、秋晴れの中、第五十回甲府市民文化祭吟剣詩舞道大会が、リッチダイヤモンド総合市民会館芸術ホールで開かれました。

今回の大会は十一月十七日に行われる第五十回市民文化祭発表部門特別企画、参加地区の代表の十団体と甲府市立大国小学校の四年生による発表会に参加するための企画を組入れ、以前の大会とは少々異なり、合吟と独吟を主体とした構成でしたが、六十番組に八十七名で日頃の稽古姿を充分発揮し、午後五時閉幕いたしました。

以前は会員数も多く、午前に始まり午後遅くまでかかりました。近年は、毎年のように会員の減少に伴い、観覧している人も減少しました。

十七日の特別企画の賑わいを見るにつけ何とかならない

ものか、大きく変貌することは無理でしょうが、少し工夫してみよう価値がありそうです。

発表の部を二つのグループに分け、お互いに観劇し合う様な関係を作り出せば、舞台でのパフォーマンスにも張りが出ますし、ちよいと入部してみようかと言う人も出て来るかもしれません。



日々是好日

茶道部

今井 宗久

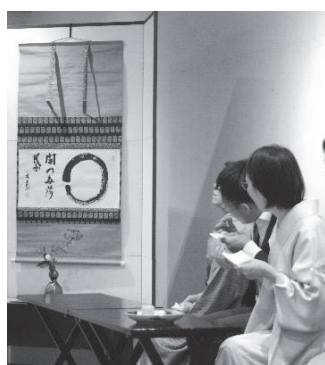
今年で甲府市民文化祭は五十回という節目を迎えました。誠におめでとうございます。発行された冊子を拝見し実

行委員の皆様をはじめ、このように大勢の方々が各部門で活躍されていることに、今更ながら驚きました。

茶道部も長きに亘り参加してまいりました。あのコロナ禍から五年経ちます。先の見えないう状況の中、不安ばかりでしたが、何とか凌ぎ、徐々に平常に戻ってきたことは何よりの喜びです。

「茶の湯」は総合芸術とも言われる計り知れない文化です。五感で堪能し、楽しんではいかがでしょうか。そして心も体も健やかに送ることを目指しています。日常生活とはかけ離れた存在に思われがちですが、茶道の教えは普段の生活に結びついています。

甲府市民文化祭茶会に老若男女、お一人でも多くの方に参加してもらいたいと思います。そして、次世代にしっかりと引き



継ぐことも念頭に、精進してまいります。

能のリズム、実は…

能 楽 部

佐藤 眞弓

日本が誇る究極の芸術と評される能楽は室町時代、猿楽から曲舞を経て観阿弥、世阿弥により深められ、能楽というものになったことは、よく知られています。室町時代後半、乱世になると表に出てきませんが、時代を経て江戸時代になって世の中が落ち着いてくると、再び、

能役者は大名に庇護され継続されてきました。能楽は敷居が高く簡単に踏み込めないものという感覚が持たれるようになってきたのでしょうか。しかし、藩によっては推奨され、金沢では、「空から謡が降ってくる」と言われるほど謡曲が市民の間に普及していた時期があったようです。現在でも、町に住む、様々な職業についている人たちが、謡曲を習い、笛、太鼓、大つづみを稽古し、素人だけの本格的な能を能舞台で演じて楽しんでいると聞きます。羨ましいですね。

能の拍子（リズム）は八ツ拍

子が原則になっていますが、他に六ツ拍子、四ツ拍子、二ツ拍子などがあります。この八ツ拍子（リズム）は何と、現在の私たちの周りにある童謡、歌謡に取り込まれて、親しまれているのです。いろいろな馴染みの歌がこの八ツ拍子（リズム）で歌われています。（例えば、もしもしかめよかめさんよとか、かあさんお肩をたたきましょ等々）私たちの身近に意識されずに親しまれているのです。決して敷居が高く、取り込みにくいものではないのです。

日々舞踊を楽しむ

過ごしている事に感謝

舞 踊 部

斉藤 羊子

二〇二四年の元旦、石川県能登半島大震災、今まだ大変な生活をしている人たちがいる現在ですが、山梨県はそれほど被害はなく、それなりの日々をすごしています。

私たちは、春には舞踊部発表会に参加し、秋には甲府市民文化祭に参加出来て日々楽しく生活していることに感謝、感謝です。石川県の方々は、舞踊どころではないかも知れませんが

が、早く普通の生活に戻ることを祈り、私たちも協力出来ることは進んでいきたいと思っています。

日々健康で楽しく生活していることに感謝し、私たちは舞踊に精進していきたいと思



第五十回市民文化祭

を終えて

邦楽部

田村 瞳 声

第五十回という記念すべき節目の市民文化祭が開催され、邦楽部の発表は十一月四日（月・振休）の午前の部に大正琴、午後の部に三曲（箏・三絃、尺八）と長唄の演奏が行われました。

午後の部には、海外から日本語の勉強に来甲し、日本の伝統芸能・文化に興味をもつ若者が、短期間で曲を習得し、あこがれ

の着物姿で演奏し、客席から大きな拍手をいただきました。また、若い世代の出演者も年々増え、喜ばしいことです。邦楽界も少しずつですが、明るい兆しが見えて来た気がします。更には十一月十七日（日）に行われました発表部門特別企画では、各部門の皆様方の素晴らしい舞台を観ることができ感動しました。

邦楽部では、「武田節」を合奏しましたが、分野の違う各社中の先生方と、一つの曲を一緒に演奏することでコミュニケーションを図ることができ、すばらしい経験をさせていただきました。これからも益々、日本の伝統文化を若い世代の方々に継承しながら、邦楽部一同研鑽を積んでいきたいと思



奈良田追分への思い

民謡部

望月 孝

私が甲斐の伝統民謡「奈良田追分」を観客の前で初めて唄ったのは平成二十五年の山梨県主催の国民文化祭でした。その時の苦労は大変なものでした。唄をテープに取って踊り手側に送ること三回、ことごとくNGを食らいました。唄が遅すぎて踊れないと言つのです。それから三味線の先生と何回か打ち合わせて、本番ではテンポの速い伴奏で踊りともぴったり、大成功でした。この時の苦労はホント！並大抵のものではありませんでした。

でもこの時の体験が今になつて生きてきました。かれこれ十年経った令和六年文協の発表会で唄うことに決めたのです。あの時の感動をもう一度普及協会のメンバーと一つになつて唄いたくて！ところが今度は唄い手とお囃子のタイミングがなかなか合わなくともまた大変でした。元々普及協会は伴奏者がいなくて、本番では同好会さんに依頼していました。自分たちの練習では合つても、いざ三味線と合わせてみ

るとなかなか合いません。

やつと同好会の小松さんの掛け声によつて「バッチリ」合うようになり、本番を迎えた時、メンバーの一人一人が感動を持って唄うことが出来ました。客席からも大きな拍手を戴き大感激でした。やはり皆が一つになつて目標に向かって進んでいくことは、何事であつても大切なことだと思ひ知らされました。次なる目標に向かって皆頑張ります。



鳥取市で見たバレエ公演

洋舞部

深沢 由美

昨年十月、東京のバレエ団で活躍しているOGが新作バレエ「赤毛のアン」に主演するというので、鳥取市まで弾丸追っかけをしてきました。

JR鳥取駅から会場へと向かう土曜日の昼下がり。国道五十三号線沿いには、やはりシャッターが下りたままの商店も多く、少し寂しさを感じさせられました。しかし、その先にこつ然と現れた「とりぎん文化会館」は、現代的な外観の、訪れる者をワクワクさせるような建物でした。

「赤毛のアン」は、鳥取県出身の著名な指揮者の方が指揮と音楽監督を務め、地元のオケが生演奏し、振付・演出や主な役を踊るダンサーを東京から呼び、脇を鳥取のダンサーたちが固め、曲はもちろん、衣裳、舞台装置に至るまで新しく制作するというものでした。とうの昔に踊る側から舞台を作る側に回った人間としては、いったいいくらかかるのだろうかという思いが真つ先に浮かびましたが、二十億円の基本財産を有する（公財）鳥取県文化振興財団が主催し制作する作品でした。

「ハコ」を作り、維持管理していくのには大変な費用がかかり、それを活かす中身を作るのにも大変なお金がかかります。鳥取で見た地元の子もたちは楽しい舞台に目を輝かせ

ていました。いつか甲府や山梨の子どもたちにも、という思いを強く持った旅でした。

見学研修旅行に参加して

華道部

志村 茂雲

華道部の行事に、見学研修旅行があります。会員の親睦を深め、今後の活動に生かせる目的です。毎年、行き先・内容・日程等、何回も会議を重ね、検討します。今年度は、七月四日に埼玉方面へ決定しました。梅雨時も考慮し、屋内見学を計画しましたが、とても暑くなり熱中症を心配することとなりました。

まず、川越のまつり会館を見学しました。館内は、まるで十月のお祭り当日に参加しているかの様な体験ができました。その後、小江戸自由散策をしました。甲府と同じ地方都市ですが、近年観光客も増え活気のある町の風景に驚かされました。昼食後は、埼玉園芸市場の視察研修を行いました。市場の見学は、初めてでしたが、多種多様な植物の説明や、流通の難しさなどを教えていただき、今後の花材の調達の情報を学ぶこ

とができました。

華道人口が減少しつつある中、微力ながら伝統文化の継承を心がけ精進してまいりたいと思います。



進化する文化協会

工芸部

石川 顕

私たちの文化協会は、地域の伝統や文化を守り、次の世代へと継承していく重要な役割を担っています。

しかし、昨今の会員数の減少は、協会の継続や活動に大きな影響を及ぼしつつあります。この状況を改善し発展を遂げるためには、組織の在り方や活動内容について見直し、幅広い世代にとってより魅力的な協会へと進化することが必要です。

一 魅力的なプログラム
若年層や新規参加者の二

ズに合わせたプログラムの検討、たとえば、ワークショップや体験イベントの増加、新しい文化分野の取り入れ、多様な興味に対応できるような活動を増やすことで、より多くの方に参加していただける可能性が高まります。

二 広報・宣伝活動の強化

広報活動を強化し、地域社会に協会の存在や活動をより効果的にアピールすることが重要です。協会の魅力やイベント情報を積極的に発信することで、新規会員の獲得を目指します。

三 参加機会の向上

会員が参加しやすい仕組みや柔軟なスケジュールを提供することで、より幅広い層の参加を促進できます。例えば、オンラインでの会合や参加が可能なイベントの開催、夜間や週末の活動増加を検討し、多様なニーズに対応する柔軟な体制を築くことで、既存会員の活動参加率の向上も期待できます。

四 既存会員との対話

現在活動されている方々の意見を定期的にヒヤリングし、求める活動や課題に対して反映することが大切です。

地域に根ざし、多くの方々に

支えられる文化協会をめざします。

私が幸せの時

写真部

村松 義輝

甲府市の歴史に大きな発展があり、市民の歴史と文化への関心の深さを感じます。「心に残そう文化の灯」をテーマに展示発表部門とよりつばな成果で、文化祭は各部門の作品の発展の交流の場です。私も交流の場の一人として好きな写真を撮っています。今は電車を写していて、近場の中央線では思ったより多く走っています。「あずさ」「四季島」「EH二〇〇―三」「E三三三系」を写していますが、まだいくつもあります。撮影も踏切の辺では、画にならないので画面がひらけた畑の中とか人家の少ない所で狙うので大変です。それに出合う時間が大変で三十分位はいつも待っていて、出合ったあとの気分は疲れが抜け気分爽快です。最近写した私の好きな写真は、東海道新幹線の畑の中より写した空は雲一つない青空に、頭だけ白い雲を被った富士山、その前を走る電車は黄色一色、



名前は「ドクターイエロー」、バックの富士山のクロに色映えて、その前景に黄色の菜の花一面の畑、お詠えのような場面での一枚です。好きな被写体に合うと、写真を撮っている幸せを感じます。又幸せを求めて。

第五十回甲府市民

文化祭を終えて

書道部

矢崎 美咲

淡いピンク色の秋明菊が風に揺れて、こちら向きに咲いている。第五十回甲府市民文化祭が十一月二、三、四日と開催された。振り返ると鬼籍に入られた小川清華先生、平井漱雲先生、

数野菱華先生方が書道部を立ち上げて下さり感謝である。

今年は専門部七十四名、地区文協と個人五十五名、合計一二九名出品された。良い文化祭となるよう作品作り、展示方法、名票飾り等団体ごとに気をつけた。名票の題名部分を広げていただいたので、書きやすかったと思われる。

事前PR展、受賞者展等の試みも大変だったけれど楽しめたのではないだろうか。

秋は作品発表の場もたくさんあり、見る機会もあり楽しい季節である。当番をしているとこんな言葉が聞こえてきた。

「書は何が書いてあるかわからない。読めない」と。私もそう思う。変体仮名やくずした字、また漢字等解釈するのは大変である。そこで読もうとせず、感じてもらいたいと思う。作品を見て、①いい感じだ、②ちんぷんかんぷんだ、③ちよつといやだ、に分ける。そして①のいい感じはどこがそう思うか見直す。そんな見方から入ってもらいたい。

日本独自の仮名は美しく、見ると心が落ち着き、平安の世へ誘ってくれる。秋の夜長を楽しんでみませんか。



水石へのお誘い

水 石 部

鈴木 貴 文

水石は盆栽と同じく、日本で独自に発展した自然を鑑賞する文化です。

小さな石に自然の山や島や滝などを連想して楽しむ趣味です。特に山梨県は、大きな河川の富士川や釜無川などに恵まれており、釜無川支流の大武川の滝石は日本一評価されております。

石を鑑賞する文化はいろいろありますが、水石は石の持つ自然の趣きや造形を思い起こさせる魅力があります。また、探石は河原や山に行き、数個の形姿のある自然の石をみつめることから簡単に始められ、食事と飲み物を持参し、一日河原で自然に触れることで心身がリフレッシュでき楽しいです。

素晴らしい水石の文化をもっと多くの方々に知ってもらい、日本独自の文化を広めたいと思います。



第五十回甲府市民

文化祭を終えて

美術部

松七五三 美和

記念すべき、第五十回文化祭が華やかに開催され、今年のテーマに沿った展示美術部門が無事終えたことに喜びを噛みしめております。

人生百年時代、「いかに楽しく健やかに」の中で美術部では多種多様の申込みがあり、努力の賜のレベルの高い作品が多く、その中で受賞された熟年を重ねた九十四歳の方や、参加希望の一般の方々など発表の場として成果があり、美術部の未来は明るいと感じております。今回は五十回記念PRとし

て、市役所一階市民活動室での三日間展示、山の都アリーナでの三日間展示、受賞作品を市民活動室での三日間展示など、大変な行事を出品者の方や事務局のご協力を得て、実りの多い文化芸術活動を得ることが出来ました。

今後の美術部としては、日頃の創作活動が心の支えとなり、発表の場で交流、毎日の生活に負担の無い行事など、美術及び絵画に興味のある一般の方々も参加して、楽しく活動していきたいと思っております。



うれしい変化

文学部

河野 一 郎

第五十回甲府市民文化祭文学部門は、会員の皆様の多大なるご支援・ご協力のもと、大変充実した展示・発表を実施する

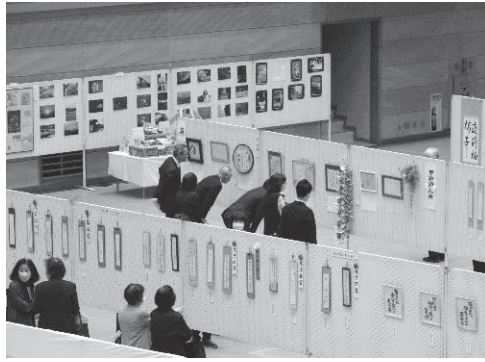
ことができました。

さて今年度はとても喜ばしい新たな変化が起きました。それは、俳句部門において、地区文化協会で二団体、短歌部門で一団体の新しい参加があり、また、川柳部門では一団体が復活して作品を発表してくれたことです。しかも、新規に加わっていたいただいた俳句の二団体に所属する二人の会員が、文学部賞を受賞することができました。

しかし、残念なこともありました。それは、俳句の専門部の一つと、地区文化協会の川柳部の一つが退会となったことです。いずれも会員の高齢化に伴って、会の継続が困難となったためです。

ここ数年、会員の高齢化や新規加入者数の減少が原因で、市民文化祭への展示作品数の減少への対応が課題となっており、今年度は昨年度に比して、十四作品の減少でした。その解決策の根本的な柱になるのではないかと考えられる出来事がありました。それは、俳句の専門部の作品を鑑賞したことがきっかけとなって、加入したいとの希望を伝えてくれた人が現れたことです。とても

うれしく、会員の励みにもなります。つまり、心に訴える良い作品を発表し続けていけば、必ず心ある人の目に留まるということです。会員の皆様にはこのことに充分留意していただいて、日々の精進を欠かさずに作品を作り続けていってほしいと切に願っています。



文化祭に咲くすみれ

盆栽部

今井 千代子

今年も甲府盆地は酷暑が続く、葡萄などの農作物に被害が出ているという報道が流れました。

私はすみれを育てているので、今年の酷暑から少しでも護ってやりたいと思い、朝・夕の

水やりはもちろん、寒冷紗で日陰にしたり、ミストと扇風機で温度を下げたり、増えた害虫の被害にあわないように注意したりと、普段以上に目をかけました。

また例年でしたら、文化祭が開催される頃には気温が下がり、秋が来たと花芽をつけるすみれもありましたが、今年はいつまでも暑さが続き涼しくありません。そこで文化祭にすみれの開花を合わせるために、生育状況に合わせて温度管理を徹底しました。その甲斐あり、「すみれ達の祭典」の十種類の中で「エイザンスミレ」と「オトメシチトウスミレ」が花をつけてくれ、結果として、文化祭賞をいただきました。

これから秋に開催される文化祭に合わせ、沢山の種類のすみれに花を咲かせて展示できるように、努力して行きたいと思っています。



「朗読・表現 さまざまな会の今」

演劇部

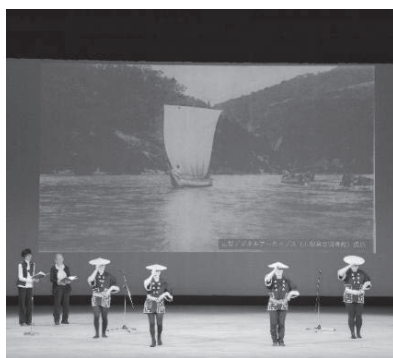
渡邊 恵美子

尊敬する河野司先生（初代会長）を私達のレッスンにお迎えした時、私は司書として、本と子どもを結ぶため、上手に読み聞かせをしたいものだと思いの門を潜り、丁寧なレッスンに心躍らせました。急な病で亡くなられた河野先生の後を継がれた渡邊昌恵先生は、現在、甲府南支部の講師として、作品の心の見詰め方を導いてくださっています。

県内には五つの支部があり、甲府市立図書館で開かれる「さまざまな朗読館」で耳からの読書を合言葉に、皆さん研鑽を積み力強く活動しています。私の所属する韮崎支部では、児童館や学校、公民館等のお声掛けを頂き日々の朗読の勉強をしています。

今年は平和実行委員会の「平和のつどい」が開催され、朗読劇壺井栄作「石つすの歌」を発表。平和を訴えてきた河野先生の心を繋ぐことができました。また、文化協会の生涯学習フエスタでも、写真部・舞踊

部とのコラボによる朗読劇の公演を行いました。朗読表現さまざまな会は、皆が互いに尊重し合い、活かし合うことで豊かな心や絆が生まれると信じ、今後も良いステージを目指します。また、甲府市文化協会の演劇部の部長を長く務められた河野司先生が、常に口にされた「心から心へ」の精神でこれからも語っていききたいと思っています。



第五十回甲府市民

文化祭を終えて

合唱部

岡田 恭子

令和六年度の甲府市民文化祭は、第五十回を記念して様々な企画が計画・実施され、充実した内容となりました。

五十回と一口で言っても、半

世紀に亘る歴史の積み重ねは非常に重く貴重なものであったと思います。個人的には、この市民文化祭に関わったのはここ数年であり、特にコロナ禍にあつて合唱活動が制限された時期を何とか乗り越えて、感染防止対策を講じながらの舞台発表ができたことが心に残っています。

さらに、今回は五十回記念の特別企画に参加させていただいたことは、大きな喜びでした。合唱部では、所属団体に呼びかけて特別企画に参加する有志を募り取り組むこととしました。どんな楽曲に取り組もうか、指揮・指導、ピアノ伴奏をお願いする先生方は…、全体練習の日程・会場は…、具体的な問題を一つずつクリアして、十一月十七日の発表に至りました。

発表した楽曲は、甲府市制百周年を記念して作られた交響組曲「遙かなる時を超えて」から、朝の歌、終章でした。新しい一日が始まる明るい希望に満ちた楽しい歌（朝の歌）と県都甲府のさらなる飛翔を願った終章を、児童合唱を交えて総勢八十余名が謳いあげました。参加者一同充実感をもってステージを降りることができま

した。ご指導くださった落合節子先生、後藤智美先生、参加してくださった皆さまに心より感謝申し上げます。



楽器演奏の效能

合奏部

遠山

忍

合奏部の会員は、何らかの楽器を演奏します。

文化祭のステージで、生き生きと演奏している姿は、皆さん元気で若々しく感じます。実際、私自身も、同年代の人たちに比べて若く見られることが多いのです。それはおそらく、日頃私が趣味として楽器に接しているため、無意識に「楽器演奏の效能」を享受しているせい

はないかと思っています。

多くの脳科学者は、楽器の演奏が「脳」にもたらす効果を高く評価しています。

楽曲を演奏するには、まず譜面の情報を瞬時に頭の中で処理し、それを指先に伝えます。両方の手や指を駆使して動かす運指は日ごろの生活ではあり得ない動きを強いられます。また管楽器やオカリナ、ハーモニカなどの吹奏楽器なら、手指だけでなく、呼吸法の基本である腹式呼吸を体得することにもなります。

どんな楽器でも、演奏することによって、「視覚」「聴覚」「運動覚」が一斉に複雑な相互作用を始め、まるで脳が全身運動をしているかのように活発に動き回ると考えられているそうです。

音楽は、聴くことで感性を養い、奏でることで脳を鍛えてくれるのです。否応なく押し寄せる年波は避けられませんが、好きな楽器から少しでも「老化防止のパワー」を貰っているとしたら、もう少し続けてみようかと思っています。



地区文協から

千代田地区文化協会と

学校の関わり

千代田地区

末木 照久

私たちの地区は、文化祭・運動会等、常に小学校との協力のもと行っています。

今年は十一月三日の文化の日、小学校の体育館を会場に小学校のオータムフェスタと合同で文化祭を開催しました。



私たちは、児童の一分間スピーチを聴講し、児童は私たちの展示物の中の盆栽が珍しい

等々、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

先生方とも準備の段階から親交が深まり、地区内の今後のことにも意見をいただきました。今後、発展のある文化協会としていきたいと思っています。

文化祭のテーマに想う

里垣地区

福田 勝子

本年度の文化祭にテーマが示されました。「里垣の歴史ある文化をみんなで繋げよう」です。十二部会が継続し、素晴らしい発表をされており、里垣地区の文化が継続されているのが感じられて、大変うれしく思いました。

文化祭開催は十月二十日になり、その日は里垣地区の運動会と重なり、天気が心配されましたが、雨も降らず、多くの方々がご来場され、一安心しました。

甲府市文化協会会長の樋口雄一市長も、お忙しいなかをお

越しくださり、お声をいただいたことを、文化祭参加者一同、大変感動しうれしく思いました。

今後も会員一同、文化活動に取り組み、文化の継承に一層努力していきたいと思っています。

趣味は人生の潤滑油

貢川地区

伊東 祐三

私たちは、朝起きてから寝るまで、文化という流れの中で生活をしています。そんな空気のような存在ですが、年に一度、文化祭という名のもと、一同に自慢の傑作を持ち込んで展示したり、練習してきた歌や踊りを発表したりと賑やかな文化祭となります。「趣味は人生の潤滑油」と言いますが、潤滑油のお陰で仕事や生活が豊かになります。

さて、貢川地区では十三自治会の参加で、展示の部は三十名、子どもクラブ写生大会の作品四十品、富竹中学校の書道作品、やさしい手・ホープステーションなど、合計二四〇作品が展示されました。

子どもクラブは第三十八回親子三代の写生大会が初秋の

美術館で開催され、初の写真部とのコラボ企画を含め、喜んでいただきました。

発表の部ではそれぞれの演目で七十名が合唱や大正琴、フオークダンス、ハワイアン、舞踊、薙刀など日頃の成果を披露してくれました。高齢の方や若い方が一緒になって笑顔で踊ったり、コーラスをしたり、楽器を弾いたり、熱気が満ちあふれ、貢川地区のパワーが感じられました。演技者の笑顔やキラキラ光る瞳など、青春のお顔でした。私も時間も経つのも忘れていました。

午後は「音楽法話」を臨済宗妙心寺派 義雲院住職 小澤泰崇 方丈様のご協力で開催させていただきました。馴染みのある童謡・歌謡曲などをギター等で弾き語りをしながら、仏教の



教えをやさしく伝えてくれます。川の流れるように「おだやかに、おだやかに、おだやかに」歌と法話の話は自然と頭の中に入ってきます。静寂の中で、方丈様の歌と法話に感動しました。

コロナ後の貢川文化祭は、三百余名の来場者と参加者を迎え大いに盛り上がりました。

文化祭を終えて

千塚地区
日向道夫

当地区の文化祭は、例年通り実施しました。開会式には、甲府市長 樋口雄一様、甲府市議会議員 廣瀬集一様をはじめ地区の各団体長の方々をお招きし執り行いました。本年度は第四十二回を迎え、連綿と引き継がれてきた諸先輩のご苦勞に感謝する次第です。

会場の北公民館は、日々精進してきた成果を発表する場として、会員の皆さんにとって、満足感を味わえる最高の場だと推測します。

どのイベントでも、主催者側は来場者が多ければとの願望を持ちますが、思いどおりにならないのが現状です。プログラムの自治会全戸および公共施

設等への配布など、基本的な手段を尽くすことは当然ですが、あと一歩前に進める方法はないかと思案する段階です。原則的なことですが、会員の皆さんや関係者一人ひとりが、周囲へ声を掛けるなどの努力が必要ではないかと思っています。

市民文化祭も、五十回の節目を記念する、特別な企画が行われましたが、主催者、事務局のご苦勞は大変なものだったと思います。高校生、大学生、社会人の皆さんによる演奏、演技は全て素晴らしいものでした。天候や時間により来場者の出足も鈍る場面もみられました。が、それにもかかわらず出演者の熱演ぶりは、あたかも満場の観客がいるかのように錯覚し、感銘をうけました。今年も、多くの良い経験ができ、有難く思う次第です。

新生相川文協スタート

相川地区
川崎 靖

新年度を迎え、役員が大幅に入れ替わった。会長を始め三役が総入れ替えとなり、新しい相川地区文化協会がスタートした。コロナが一段落してまた活気が出てきた相川地区文化協

会ではあるのだが、課題もまた山積している。文化祭の花形であった相川小学校の合唱部、北東中学のブラスバンド部が相次いで廃部となってしまい、参加が出来なくなってしまうことで、新たな花形を探さなければならなくなった。又、各専門部も高齢化が進み、メンバー及び出展数が減ってきたこと。なかなか頭の痛い話である。それでも十月二十日に行われた相川地区文化祭は出演者をなんとか確保し、例年通り無事開催でき皆素晴らしい演技を披露していただいた。新たなメンバーで試行錯誤の日々ではあるが、皆でアイディアを持ち寄り反省すべき点は反省して邁進していきたい。

チダイヤモンド総合市民会館です。一日目の十二日は、午前中展示の準備、午後から一般公開です。二日目は、芸術ホールに於いて開会式を行い、引き続き発表の部の開演となります。今年とは特別企画として、世界大会においても大活躍の甲府商業高等学校のソングリーダー部に出演していただきました。また、今年も東小学校の児童の皆さんに素晴らしい絵画と書道の作品を出品してもらいました。お陰で芸術ホールの客席が半分近く埋まる大盛況でした。甲府商業は、昔、現在の総合市民会館の所にあつたので懐かしく感じた方も多かったことと思います。しかし、甲府商業の公演が終わると客席は随分寂しくなってしまう。これから文化祭の在り方を工夫しなければと感じたところです。

文化祭を終えて

東地区
原野 五郎

私たちの文化協会は十月十二・十三日に四十一回目の文化祭を開催しました。会場はリッ

文化芸術は、地域の繋がりがなく、日々の生活に潤いを与えてくれます。更に、健康寿命も伸ばしてくれそうです。正に、明るく豊かな地域づくりに欠かせないものとなっています。しかし、会員の高齢化が進み、新型コロナの影響もあり会員数は減少し、廃部せざるを得ないところもあります。文化協会の活性化

は早急に対応しなければなら
ない課題だと思えます。

「国母郷土史研究部」

発足と活動

国母地区

内藤 恭二

十月十九日・二十日、昨年より一日多い日程で、国母地区「第三十九回文化祭」が盛大に開催されました。「羽ばたけ未来へつなごう 文化の町国母」をスローガンに、今年の講演は「姫見塚」を取り上げました。姫見塚は、国母地区内にある伝承の史跡で、摂関政治の礎を築いた藤原良房の娘「染殿」の後、藤原明子（ふじわらのあきらけいこ）が祀られています。

さて、郷土史研究部発足と今年の文化祭講演テーマの引き金は、大河ドラマ「光る君へ」です。第四十回では、文徳天皇と明子の子「清和天皇」の外戚（外祖父）である「藤原良房」の話が登場しましたが、藤原家が権力をほしいままにする情景が浮かびます。

放映決定と同時に、国母文協が動きました。明子終焉の地と伝承される「姫見塚」。これを機に、再び郷土史の研究を深める、遠く平安朝時代の故郷に思

いを馳せてみたい、そんな熱き思いが郷土史研究部の発足、文化祭のテーマに繋がりました。

郷土史研究部は、部員二十一名により令和六年六月一日に発足、年四回の定例会を行う予定です。国母という地名は全国に唯一です。清和天皇の母明子は文徳天皇の後、清和天皇の母つまり「国の母、国母（こくも、こくぼ）」です。かつて盆地には、「稲積の荘」という明子の所領があり、時の人たちはこの一部を「国母の郷」と呼びました。この名が「稲積国母地蔵」に継承され、明治二十二年には国母村が誕生します。これは『甲斐国志』『中巨摩郡志』から紐解きました。

この研究成果として、文化祭では二つの講演と、歌とピアノそして舞踊による「姫見塚哀歌」を披露しました。今後は、郷土史のみならず、文化教養に資する様々な取組みを模索したいと考えております。

久しぶりの

パーフェクト文化祭

山城地区

藤田 亮

令和六年十月二十七日に第四十一回山城地区文化祭を開

催いたしました。

今回は一切の制約がない形での開催が約束されていまして、数年間のブランクの影響は少なからずありましたが、準備段階より、新しい実行委員会の面々の熱い志を軸に、全会員の「久しぶりの文化祭を成功させよう」というスローガンのもとで準備も整いました。

しかし開催直前になり、大きな落とし穴が待ち構えていました。…なんと文化祭開催日が衆議院選挙の投票日と重なることとなってしまいました。通常の大ホールが使えない、充実した音響設備が使えない等々。しかたなくホールの奥側にある温泉施設の畳敷きの控室での開催となりました。ただ、このことが「とんでもない」結果をもたらしました。



コンパクトで段差がない空間なので、演者と観衆の距離感が縮まり、白熱した演目が迫りくるような効果を生んだのでした。例えば剣舞などは観衆のけぞる場面も。

いずれにせよ大変充実した感動的な文化祭でした。

文化祭を終えて

穴切地区

丸山 文雄

「広げよう ふやそう仲間次世代へ」をスローガンに、第四十一回の文化祭が行われました。昨年度に引き続き、午前中のみの開催ではありましたが、地区の各種団体長等が参加してくださいました。

まず展示部門は郷土研究部・書道部・写真部の作品があり、特別展示として地区内の小学校の出品や地域の方の出品がありました。ただ展示場所が限られてしまっているため、今後展示方法の工夫が求められます。対局部門は囲碁将棋部が盤を用意して来場者を待ちましたが、時間が少ないため多くの来場者は望めませんでした。最後に、発表部門は歌謡部・合唱部が行いました。練習時間が取れない中ではありましたが、

無事に終わることができました。

全体的な課題として、参観者・来場者の増加を図る必要があります。また、数年来の懸案であります会員の高齢化と入会者の減少は抜本的な解決策がなかなか見つかりません。若者数の減少に加え、好きな時に好きなことができる時代です。団体に所属することに窮屈さを感じる若者が多いようです。その結果、入会を断られます。このように多くの課題や改善点に対する取り組みを進めながら、会員一同「穴切文化」の継承発展に向けて努力して参りたいと存じます。

第三十八回文化祭を

終えて

玉諸地区

宮川 千織

玉諸地区文化祭が、地域の交流と文化の発展を目的として開催されました。参加者はそれぞれの特技や趣味を生かし、発表や作品展示を行いました。

子どもたちの元気な太鼓の演奏など様々なパフォーマンスは、訪れた地域の方々に元気を与え、地域の絆を深める素晴らしい機会となりました。会場

文化協会二〇二四 新紺屋地区

山田 厚

は、和やかな雰囲気包まれ、参加者も観客も楽しんでいました。地域の方々の様々な作品が多数展示され、訪れた方々は、それらを楽しみながら、地域の文化に触れることができたと思います。

このように文化祭を通じて、地域の方々が一堂に会し、お互いの文化を尊重し合うことは、今後の地区の文化の発展に大きく寄与することと思います。次回の文化祭に向けて、さらなるアイディアや参加者の声を反映させ、より多くの方々が楽しめるイベントにしていきたいと思っています。今後、文化の継承と発展を目指していくことが重要になってくると思います。

なかでも盛り上がるのは新紺屋小学校の子どもさんのコーラスです。これは市の連合音楽会に参加された四年生の発表成果を、地区にも見せていただくものです。保護者の方々も大勢お見えになり、この発表が一番盛り上がります。

今回は地区内の本格的なアーティスト(ギターの相川達也さん)を特別にお呼びして、みなさんで「アンコール！」もお願いしながら楽しみました。

参加者も減ってはいませんが、でも課題としては、展示部門が次第に少なくなっていることです。それは「高齢化」「ゆとりの無さ」の傾向だと思っています。今後の改善課題として取り組んでいきます。



湯田地区の文化祭

湯田地区

坂本 雅哉

湯田地区の文化祭は十一月十七日に開催されました。当日は天候にも恵まれ、「湯田地区ふれあい祭り」として、スポーツ協会・食生活改善推進委員会・愛育会・子どもクラブ・各種役員の皆様などにご協力をいただく中で、校庭ではグラウンドゴルフ大会や、子どもたちのためのゲーム、また体育館の前では、カレーや甲府市の水も提供され、子どもから高齢者まで多くの住民で賑わいました。

開会式では、ご多忙の中、樋口甲府市長よりご挨拶をいただきました。文化祭は、新型コロナウイルス



の影響で数年間に亘り開催することが出来なかったため、出展希望者への連絡等行き届かないことが多く、コロナ前と比較すると出展数としてはやや寂しいものとなりました。

湯田第一自治会からは「樹脂粘土の花」、東二条北自治会からは「巾着・コースター・パッチワーク」、湯田第二自治会からは「千支飾り・柱飾り」、若松町北部自治会からは「バッグ」など、愛着を込めた色とりどりの手作りの品が出展されました。身近な作品だけに、来場者の多くも興味をひかれたのか、熱心に見入っていました。

また、絵画は湯田第二自治会から「路傍の館」二点、「庭の花」

十月十日、今年は、取材旅行として『秋の鎌倉の旅』を行いました。当日は天気にも恵まれ予定どおり鎌倉に着き、「高德院大仏殿」で鎌倉大仏を参拝し、全員で記念写真を撮りました。鎌倉は、秋の修学旅行やインパウンドの外国人で大変な人出でした。

「文協ふれあいの旅」

に参加して

朝日地区
伴 賢二

一点が出展され、プロの画家の絵画もあったために、そのレベルの高さに来場者も見とれていました。

そして、学校側の配慮により、湯田小学校の一年生から六年生の児童の絵画も展示していただいたため、子ども連れの人たちにも多く来場していただくことが出来ました。

で有名な「鶴岡八幡宮」を参詣しました。

二〇二二年に放映された、NHKの大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」を思い出し、源実朝が甥の公暁に暗殺された巨大な石段を踏みしめて降りながら、八百年前の歴史をしのびました。二尺以上の雪が降り積もる中、公暁が隠れていたという樹齢千年を超える大銀杏の木は、二〇一〇年に倒壊し今は巨大な切り株だけが残っています。

帰りのバスでは、昨年に続き差し入れて出された「久保田万寿」を飲み、上戸には無上の旅となりました。予定どおりに十八時には帰甲し、和気あいあいの楽しい旅となりました。四十二名の参加で、キャンセル待ちが出るほどの人気ぶり、写真、俳句、短歌、川柳等の作品が、十一月九日、十日の文化祭で展示されました。

文化祭

富士川地区

菊地

健

十一月十七日(日)開催の地区文化祭に向け金曜から準備。富士川悠遊館菊水ホールにパネルを並び椅子、ステージを設置。ここ数日天気が悪い。その

日も曇り時々小雨。

コロナ後の各部会の活動は低迷。作品の展示を求めても活動休止中の部もある。個人的繋がり作品を募集。その上、雨でも降れば来場者はさらに少ない。

土曜曇り。午前中、搬入と二〇名参加の生け花教室。制作した花は展示。午後展示を公開。三枚並べた一面に何も無い。そこに作品応募の連絡。車で馳せ参じると、一〇〇号の大作と三本の油絵。一面が埋まる。

翌日曜、曇り空が一転晴れ、文化祭日和。開会式後、女性レクリエーション部「甲府市の歌」の踊り。中央保育所年長さんが踊れば、家族が携帯を高く掲げ、場内は熱気に溢れる。オカリナ



演奏。続いてのフラダンスは子どもを含めた総勢二〇名。壮観。市長登場。

午後再び曇り。以下略。総体としては盛会。

地区文化祭を盛大に実施

相生地区

雨宮 秀

令和六年十月六日、第三十六回相生文化祭が、「光り輝け相生の文化」のスローガンのもと、旧相生小学校体育館において開催された。

来賓には、相生地区自治会連合会会長、甲府市地域保健課保健師をお迎えして実施。また途中、甲府市文化協会会長の樋口市長がお忙しい中、激励に駆けつけてくださった。

「展示の部」では、絵画部、書道部、盆栽部など、日頃の研鑽が見事に結晶された作品が展示された。また地区内福祉施設から入居者の作品や地区内の保育園園児の絵なども出展され会場を彩った。

「発表の部」では、レクリエーションダンス部、洋舞部(フラダンス)、ハーモニカ部、歌謡部(カポエラ)などの発表が行われ楽しいひと時となった。しかし、毎年のことながら観

客が少なく、せっかくの展示・発表もなにか勿体ないような気持ちであった。今後は、二十一世紀まちづくり協議会のフォーラムとの共催などを検討していきたい。

若きテノール歌手に

感謝

池田地区

塚原 みゆき

第三十三回池田地区文化祭が十月十九・二十日に開催されました。展示部門では文協専門部の作品はじめ、各自治会・幼稚園・小・中・高校・PTA・施設入所者の作品と、池田地区のいたる所から作品が集まり、コロナ前以上の数となりました。

発表部門においては、コロナ前に比べ数が減ってしまいましたが、高校生の舞台発表もあり、若者のパワーをもらうことが出来ました。

昨年、「池田地区のいたる所に目を向け、耳を傾けよう」と動き、その甲斐あって「この池田地区にすばらしいアーティストが居る」との情報を得ました。その方がテノール歌手「坂本響さん」でした。世界的に活躍している方が「この池田に居

る」ことに、まずびっくりしました。しかも世界中を飛び回っている坂本さんが、小さな地区の小さなステージに立つことを、快く承諾してくださるという、信じられないことが実現したのです。

地域の方々の反響も大きく、もっと多くの人に聞いていただきたいと、今年も図々しくお願いした所、まさかの「OK」。今年は池田地区に住んでいるピアノ教室の先生とのコラボ、会場の方々の合唱等、坂本さんの人柄を垣間見ることができました。坂本響さんには本当に感謝しています。

池田地区住民は、坂本響さんのご活躍を今後も応援していきます。

文化祭を終えて

春日地区

清水 明

十一月十六日、十七日の二日間亘って、春日地区の文化祭が開催されました。

令和元年以来、途絶えていた児童生徒の作品も、舞鶴小学校、こども保育園の協力により久しぶりに復活しました。会場の大ホールも会員や各自治会からの出品も併せて、素晴らしい

い展示になりました。準備については、各自治会から大勢の方々に出ていただき、演台や五十枚近くのパネルの設置等、非常に大変な作業をスムーズに終えることが出来て、文化祭も成功裏の内に終了しました。

春日地区の文化協会も会員の高齢化が進み活動が維持出来ない部も出てきて、将来の文化協会が不安視されていますが、文化の灯は絶対に消してはいけなと思っています。地域住民の絆を深めるためにも、又、明るく健康的な地域をつくるためにも、これからも文化活動をしつかり続け、守っていかなければならぬと思います。

第三十三回 地区文化祭に思う

羽黒地区

山下 知

今年は新規参加の方々が数組あつて頼もしく喜ばしく思われました反面、やはり文化協会会員でない一般の人々の来場が少ない寂しさが感じられました。

各専門部の方々が日頃から楽しみながら研鑽を積み重ねて、その成果を文化祭の場で発表して明日に伝えて行く活動

そのものが文化であり、人の心と心をつなぐ大切な宝だと思っています。

現在は車とスマホの社会と言つても過言でなく、情報があふれかえっていますが、人々との心の触れ合いが薄れて行くような寂しさと危機感を覚えるのは私のような年寄りだけだと済ませておけない気持ちになることが度々です。例えば、車の運転中に進路を譲ってくれた人の顔も見ないでハザードランプを点灯して済ませることが習慣となり、朝の挨拶をメールするのと同じような味気無さを覚えるのは私だけでしょうか。

やはり文化活動を通じて心と心のつながりを伝えて行くことの大切さを大いに感じるところです。



この先も体力の続く限り文化活動が続けて行くための方策を会員の皆さんと相談してゆきたいと思っています。

「空高く同窓会の報せくる」

甲運地区文協の現在

甲運地区

寺田 義彦

甲運地区文化協会は、「詩吟」「大正琴」「舞踊」「ちぎり絵」「書道」「合唱」「美術」「写真」の八つの部があり、五十名を超える皆さんが会員となつております。

コロナ禍においては、活動も大幅に制限され、会員の減少もありましたが、五類移行後は、多くの皆さんが楽しく文化芸術活動に励んでいます。仲間とともに行う練習や創作活動は和気あいあいとした様子で、皆さんのお元氣な姿から、心身の健康増進にも繋がっていることがうかがえます。

また、昨年度からは、年一回の地区文化祭も復活し、今年度は、去る十一月十七日に「第三十三回目」となる文化祭を開催しました。当日は、会員の皆さんの舞台発表や作品展示、そして甲運小学校の児童や一般応募の皆さんの作品展示も行わ

れました。会員の皆さんだけでなく、地域の多くの皆さんにもお越しいただき、賑やかな雰囲気の中で終えることができました。開催にあたりご協力いただいた方々に感謝を申し上げますとともに、地区の文化祭が、地域の皆さんにとって文化に親しむ良き機会となるよう、今後も末永く継続していきたいと感じたところです。

これからも、文化芸術の振興はもとより、元氣と笑顔溢れる地域づくりの一助となるよう、会員の皆さん、地域の皆さんとともに楽しく活動してまいります。

第三十一回 大國地区文化祭を終えて

大國地区

杉田 小春

相変わらず感染症の心配は続きますが、昨年につき文化祭の開催が叶いました。

五年ぶりに大國小学校五年生の合唱「ビリーブ」を聞くことが出来ました。平成十四年より発表の部のトップを飾ってくれています。三年生の「私の地域・歴史探訪」は、八十四名の代表四名がスピーチとスクリーンで報告してくれました。

先人の知恵と教訓を伝えていきたいと思っています。生徒全員の書道、絵画も展示され会場が盛り上がりました。

会員は一年間の文化活動の成果を舞台で、また、展示で発表し、楽しい時間を共有できました。何より、「ふれあい」を大切に考えております。高齢化等の課題はありますが、心と力を合わせて進みたいと思っています。



北新文化協会の活動

北新地区

篠原 敏朗

北新文化協会には次の部会があります。詩吟部、朗読部、民謡舞踊部、邦楽部、文学部、リメーク部、書道部、木彫部、

写真部、茶道部の十部会です。

各自で日々の研鑽を重ねた成果を、十月六日（日）に北新小学校体育館で行った文化祭で発表いたしました。この他に一般参加作品として絵画、貼り絵がありました。また、北新小学校児童作品として習字と絵の出品があり、当日の発表では北新保育所園児による可愛い歌唱、北新小学校吹奏楽部のすばらしい演奏が発表会に華を添えました。

前日の会場づくりや展示パネルの運搬・設置を連合自治会に協力していただき、地域との連携が伝統となつています。また、今年度は三十周年の節目の文化祭となりました。以前から発表会に茶道部が参加者にお茶をふるまっていました。今回は二百人分をお出しして好評でした。

文化協会の課題としては、コロナ禍と部員の高齢化が重なりいくつかの廃部がありました。また、新しい会員を募集しています。が労働環境の変化により七十才まで働くのが一般的となり新規加入が思うに任ぜられないのが実情です。しかし、文化活動には①生きがいづくり②仲間づくり③地域づくりを期待できると考え、日々活

動しています。

文化祭を終えて

新田地区

大久保 はるみ

新田地区文化祭は今年第二十五回目を迎えました。選挙の日と重なり、会場の西公民館が期日前投票の会場となるため開催が危ぶまれましたが、試行錯誤、何とか行つ事が出来、安堵いたしました。

発表の部は大ホールが使用出来ず、多目的室で民舞部の踊りに始まりました。毎回出演していただく和告寮さんのコーラスの優しい歌声に癒され、特別出演のフォルクローレの調べは哀愁に満ち、心を南米の地に運んでくれました。

展示の部も文化協会以外の様々な団体、個人の方たちにご協力いただき公民館全体に展示する事が出来ました。どの作品にも作者の思いが溢れ、見応え満載な会場となりました。

人は集い、笑顔で語り合うことが元気の源なんだろうと、文化祭を終え強く思い感じたことでした。

会員は減ってしまったけれど、地区の文化祭として来年も多くの方に協力をお願いし、活

気のある文化祭を開催出来たらと思っています。



第七十回中道地区

文化祭を開催して

中道地区

久保寺 威 徳

中道地区文化祭は、中道町が誕生した昭和三十年に第一回文化祭が開催され、令和六年を以て七十回目を迎えました。開催にあたり、本協会の礎を築きあげた先人たちの弛まぬ努力を思い心から感謝申し上げます。

「甲斐の文化の発祥地」と称されるに相応しく地域を盛り上げる中で昭和五十年代頃には七百余名の部員を擁する大

今後の中道地区の重層的で多様な歴史や伝統文化を掘り起こして次世代に引き継いで新しい時代に相応しい魅力ある中道地区文化協会を築いてゆく所存です。

編み物と私

大里地区

石 原 正 子

小さくなつて着られなくなったセーターを解き、湯のししたり、細くなつた糸は撚りあわせたりして、編み直して着せてくれた祖母を見て育つた影響か、私も編み物が大好きとなりました。

ある時、手編みのベストを着てサークルの仲間と出かけたところ「手編み、良いね」私も出来るかな?」なんて話になり、一緒に「スヌード」を編むことになりました。編み物の仲間も数名になったことから、大里文化協会に「編み物部」として加入させて頂き、活動を始め、毎週木曜日に大里悠遊館で楽しんでおります。

今では廃刊になつてしまいましたが、山日新聞社のタブロイド紙『かわせみ』に紹介されたこともあり、地区外からも編み物の仲間になつてくれた方

もありました。

「コロナ禍による休部後、数年のブランクを経て、新たに「クラフト手芸」も取り入れ、再出発しました。

モットーは「好きな作品を、好きな時間に」です。ひとつづつ上げるのにひとシーズンかかる人、二週間ほどで仕上げる人、それぞれが自分のペースで作品作りに頑張っています。

解ってはいませんが、女性の性でしょうか？ 一つ一つお喋りが：間違えて編み進んだ殆どを解いてやり直しなんてこともしばしば、それでも直せることが編み物の良いところですね。ましてや、カギ針編みは、場所もとらないし、荷物にもならないので、私は病院の待ち時間に持って行って手を動かしています。

この春から、富士川町社会福祉協議会のデイサービスに通所されている方々の「認知症マップ」作りのお手伝いをしていきます。これらの作品は、来年二月の作品展に展示し、のちに介護施設に寄贈されるそうです。どの様な認知症マップが出来上がるのか、どの様な作品展になるのか、とても楽しみです。

高北絵手紙愛好会に

参加して

石田地区

中島 光子

月例の絵手紙愛好会の勉強会が終わると、各々が描いた作品の批評、良かった点、気を付けることなど、和やかに話し合い、お茶の時間となる。そんな愛好会が発足してすでに二十年となります。

平成十六年四月、石田地区女性部研修会「絵手紙体験教室」が開催され、その六月にはさっそく高畑北部自治会により「高北絵手紙愛好会」を設立していただき、七月より第一回愛好会が高尾先生のご指導で始まり

ました。

背筋を伸ばして筆の上部を持ち、ゆつくりと線を描くことから始まり、絵もモチーフをつくり眺め、特徴をとらえ、ハガキに大きく描き、形を整えなくても、歪んでいても飾らなくてもいい。気持ちが入っていれば、絵として生きて、言葉も相手に伝わる。そんなことを念頭に、基本的なことを指導していただき、平成十六年には文化祭に初めて展示することが出来ました。熱い思い出です。

これまでの活動は、月例会は

もちろん、いきいきサロンの皆様と「干支」を描き、自分だけのオリジナル年賀状を仕上げ、敬老の日にはお祝いの言葉を添え、高齢者の方々に絵手紙を差し上げ、喜んでいただいております。

月一回の勉強会が楽しく継続でき、毎年の石田文化協会文化祭にも出展させていただけることは多くの方々に支えていただいたお陰と感謝申し上げます、今後とも元気に活動が続けていきたいと思います。

書道部の活動

伊勢・住吉地区

依田 まゆ美

私たち伊勢・住吉地区の書道部は、宮田先生のご指導のもと、十一名の部員が漢字やかなを習っています。活動は、月に二回第一、第三木曜日を基本としています。日頃は書きながらもいろいろな話に花が咲き、筆が進まなかったり、笑いで筆が乱れてしまったりすることもあります。地区や市の文化祭に出展する作品に取り組む時は、みんな真剣に作品に向き合っています。

先生はいつもそれぞれに合ったお手本を用意してくださ

います。なかなか上手に書けませんが、少しでもお手本に近づけるようにと家でも練習しています。中には毎日練習しているという部員もいて、私も見習わなければと思っています。

姿勢を正して墨をすり、半紙に向かい、思いを込めて最後の文字まで書き上げる、そんな書道の時間が日常を豊かにしてくれます。月に二回ですが書道を愛する仲間と顔を合わせるホッします。

第五十回の記念すべき市民文化祭において、部員が市文化祭賞をいただき、みんな自分のことのように喜びました。これからも精一杯練習して、楽しく豊かな生活を送っていききたいと思っています。

第四十五回

地区文化祭を終えて

琢美地区

畑 晴夫

新型コロナウイルス予防のため、前年度までは規模を縮小して開催していましたが、今年度は四十五回目の地区文化祭という節目でもあり、コロナ以前の状態で開催する方向で検討していましたが、各部も五年近い感染症の影響や指導者

の高齢化に伴う廃部・休部も多く、地区文協の弱体化が明らかとなりました。

そのような状況で文化祭を成功させるには、残された会員の結束と今まで培ってきた各自の人脈を活用し、全員が努力をして、結果を出していかなばなりません。会員の情報をもとに、手分けして文化祭への参加を呼びかけ、交渉した結果、プログラム作成期限によりやく間に合うありさまでしたが、発表や展示もスペースが足りなくなり慌ててしまう一幕もあり、以前にも増して充実した文化祭とすることが出来ました。

今回のコロナの影響は、当地文協には大きなダメージを残すこととなりました。

当面は、組織の在り方や運営の方法を新たに考え直す必要があればならない時期にきており、正念場と捉え、取組みを強化します。

私たちの役割は、地域文化を受け継ぎ、発展させ又次世代に伝えるためのつなぎ手となることです。その役割を果たしていきたいと思っています。



令和六年

第五十回甲府市民文化祭

テーマ 築いた歴史 輝く成果 更に未来に

開催期間

令和六年十一月二日(土)～

十一月二十三日(土・祝)

開催会場

リッチダイヤモンド総合市民会館

遊亀公民館

開幕式

令和六年十一月二日(土)

午前十時

展示十部門

華道 四十一人

工芸 七十二人

写真 二十二点

書道 一二九点

水石 十八点

美術 六十六点

文学 一六〇点

盆栽 十七点

高校生 八十八点

青少年作品 一三五五

発表十二部門

演劇 三十二人

合唱 三六二人

合奏 二九七人

吟剣詩舞道 一二七人



第五十回記念企画

☆発表部門特別企画

「甲府の春夏秋冬
そして未来へ」

参加部門

発表十部門

甲府市立大國小学校四年生

(甲府ラーニング・スピーチ)

二七二人

☆アリーナステージ

展示会場にて、ミニコンサートを実施しました。

開催会場

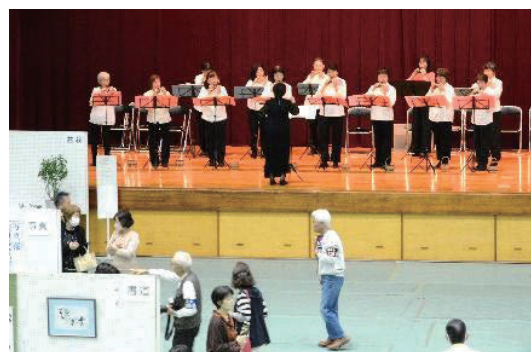
山の都アリーナ舞台

開催日

令和六年十一月二日(土)

参加部門

合奏部 七団体



☆将棋大会

甲府市文化協会会長杯

参加者数 四十八人

市民文化祭開催期間

出品者数 七四七人

出演者数 一八四八人

来場者数 延べ六一八六人

☆甲府市民プレ文化祭

第五十回記念及び甲府市民文化祭をPRすることを目的として実施しました。

開催期間

令和六年十月二十三日(水)～

十月二十五日(金)

開催会場

甲府市役所一階市民活動室

参加部門

展示八部門(十九点)

発表一部門(吟剣詩舞道部)



☆甲府市民文化祭 文化祭賞・奨励賞 受賞作品展

開催期間

令和六年十一月二十六日(火)

～十一月二十八日(木)

開催会場

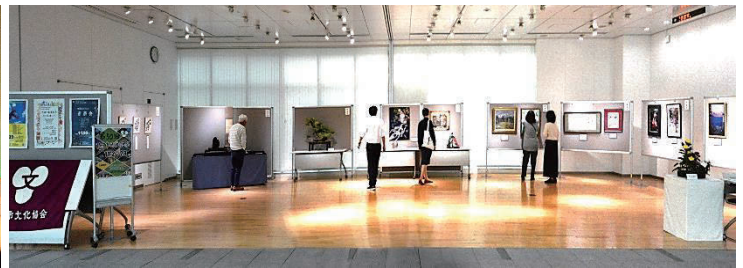
甲府市役所一階市民活動室

参加部門

展示七部門(二十五点)

華道部 特別展示 一点





甲府市民文化祭実行委員会
委員長
副委員長

委員

戸千藤小川日安福末畑吉高 深相田保佐石山遠岡渡 小河松水矢広石小 松 依山原松森数中奥矢樋
澤野田坂崎向部田木 澤橋(以上発表部門) 沢川村坂藤谷縣山田辺(以上展示部門) 泉野七五上崎瀬川林 田(以上文化協会) 田下野澤田野澤山崎
清勝 フキ 道龍勝照晴一 由宝瞳とみ眞宗清 恭政 一 美 明 昌樹 五榮芳徳 幾吼雄
茂人亮子靖夫太子久夫家要美楽声子弓美博忍子幸 泉郎 和美強咲修顕美 樹 歩知郎二弘子緑子隆一

文化祭テーマ最優秀賞 三井文子	(盆栽) 川柳 俳句	(文学)短歌 俳句	(美術)	(水石)	(書道)	(写真)	(工芸) 副委員長(美術)松七五三 美和	文化祭賞選奨委員 委員長(工芸)石川 副委員長(美術)松七五三 美和	小浅岡飯保樋(以上地区文化協会)久保寺威徳大久保はるみ篠内藤敏朗寺義清雨宮川明雨立水彦雨宮秀茂服田本尚雅坂田隆哉山田厚

特 別 出 品

銘「釜無川の滝石」

甲府市文化協会

会長 樋口雄一



釜無川の滝石は、北岳の北岸より釜無川支流の大武川に流れ落ち産出されます。

滝石は、県外でも数か所の河川で産出されますが、釜無川の滝石が、石質・形姿ともトップクラスであり、全国の愛石家が探石に訪れています。

岩から流れ落ちる二条の滝を、大自然の夫婦滝又は親子滝として鑑賞します。

銘「日々新心」

顧問 宮島雅展

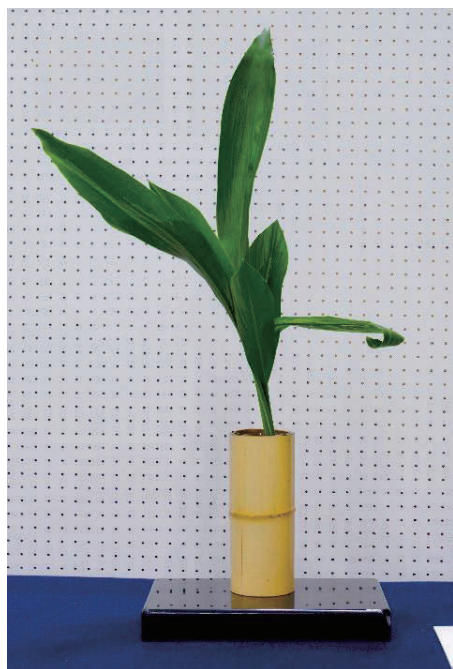


日々、心を新たに、
長生きしましょう😊

銘「生花・草流」

そうながし

顧問 鶴田一杏



伝統花形の草流の生花

第50回甲府市民文化祭 文化祭賞・奨励賞

工芸部門

奨励賞

「健康志向」 (トールペイント)

森本 きよ子 (国母)



(推薦理由) 素材とデザインのコラボレーションが良くマッチしている。

奨励賞

ドガ「スタジオのバレリーナ」

(押し花絵)

中村 恵子 (徳行)



(推薦理由) 立体的で色づかいがステキです。

文化祭賞

「ボヌール(幸せ)」

(ロマン・ドール)

名執 睦美

(上石田)



(推薦理由)

ひと花ひと花
おもいをこめて
月日をかさねて
やさしさをこめて
作った人形です。
作者の人を思う
やさしさの
人形です。

奨励賞

ふきずみげっとずざら
「吹墨月兎図皿」 (陶芸)

奥 秋 拳 志 (中学2年)

(大里町)



(推薦理由) 古来の吹墨の技法を使って、二羽の兎が仲良く月見をしている姿を表現した。素朴で純真、ほほえましい作品。

写真部門

奨励賞

うか
「羽化」

青柳正勝（善光寺）



（推薦理由） 蝶々の羽化、良い時にみつけ、羽根を広げた一時をアップで、大事なシャープで写しており、光線もやわらかで、作者の感動が表現されています。

文化祭賞

きんしゅう
「錦秋」

坂本雅彦（下飯田）



（推薦理由） 行楽地、紅葉が森の黒いバックに色映えて、川辺で僧侶が再度の水害が起きないように、水害安全祈願の折、このチャンスに出会い、この画のポイントで生きていて、良作です。

奨励賞

「ハタを振る子供」

市川君江（国玉町）



（推薦理由） 信玄公祭、天気も良く乗馬の列が通り歓迎する子ども、一番良い場所で狙っていて、馬上の人が笑顔の瞬間で良く画面いっぱいうまく収まった作品です。

奨励賞

「かわせみ」

種田喜一（後屋町）



（推薦理由） よく見る写真は、アップが多いですが、この画は少しロングから狙っていて、緑の葉が上にあるカーブした枝が、この画面に良く、ピントも良く、緑の葉もきれいで構図も良くバランスのとれた作品です。

美術部門

奨励賞

「ノスタルジックなあかり」(水彩画)

新津 久子 (飯田)



(推薦理由) 郷愁を感じるランプをメインにした作品である。骨董品であるランプを中心に、ガラスの花瓶、グラス、レモン、その下敷きの古着などを、ていねいに表現していて、努力の跡が認められる。背景の処理も一工夫されており、すみずみまで神経を使う制作態度に好感が持てる。

奨励賞

「めぐる季節に」(油彩画)

仙洞田 茂雄 (大里町)

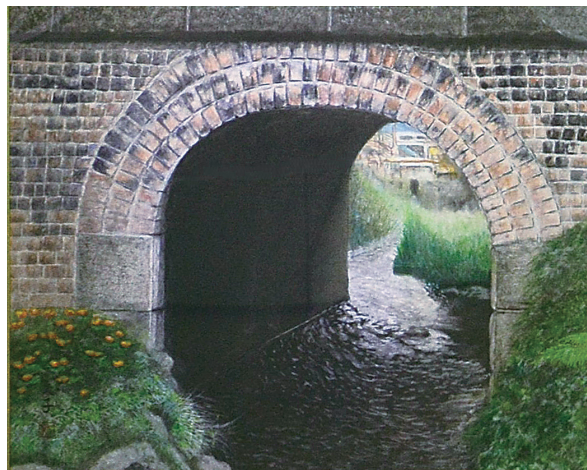


(推薦理由) 満開の桜を中心に、春めいてきた季節を表現している。一筆一筆に心を込めて描いていく作者の制作態度を評価したい。真ん中に描かれた桜の位置について、画面を二分しないように左右どちらかに少し動かす工夫をしてほしい。満開の桜の表現が、特に素晴らしい。春めいた季節感のある作品づくりに好感が持てる。さらに製作を続けるよう期待している。

文化祭賞

「街はずれ」(彩墨画)

山崎 文子 (中央)



(推薦理由) 94歳になられる山崎さん、彩墨会に所属し、元気に制作に励んでおられると言う。街はずれの陸橋、その下を流れる川を表現の対象としており、古びた陸橋の表現、川の流れなど実に巧みに表現していて素晴らしい。和紙の上に墨と顔彩で描いた作品である。文化祭賞に値する作品である。

奨励賞

「ダート 2000」(水彩画)

原 田 要 (千塚)



(推薦理由) 競走馬が、順位を競っている。動きのある場面を見事に表現している。馬の走っている様子、騎手3人の動きなど緊迫感のある場面を絵にして良い作品に仕上げている素晴らしい。

水 石 部 門

奨 励 賞

てんりゅうがわ いわがただまりいし
「天竜川 岩形溜石」

利根川 清 (中央)



(推薦理由) 主石は、岩形溜り石で、沼とも湖ともとれる玄人(くろうと)好みの秀石です。更なるは、時代的風さがほしい。

文化祭賞

あずさがわ いわがたいし
「梓川 岩形石」

大野 浩 伸 (塩部)



(推薦理由) 北アルプスを源とする梓川産石で、水石としての基本をふまえた、個性豊かな石です。また、景を引き立てるための諸道具の取り合わせと的確な遊間技法により、心楽しい席飾りです。

盆 栽 部 門

奨 励 賞

こめ
「米ツツジ」

星 野 次 男 (朝気)



(推薦理由)
日本最古園芸種でツツジ科ツツジ属の落葉低木で米粒のような小さく白い花が咲く。盆栽鉢での一年を通しての栽培は非常に難しい。冬は風霜をさけて日溜りに置く。水やりは花に水がかからない様、また、根元にはたっぷり灌水、甲府の暑さにも負けず病虫害からも葉を守り見事に枝や葉がコントラストに咲き、見晴よく表現されている「この米ツツジ」は枝先までもよく神経がゆきとどいた素晴らしい作品です。

文化祭賞

「すみれ達の祭典」

今 井 千代子
(住吉)



(推薦理由)
各種のスミレ株が一つの鉢の中で互いに競演した素晴らしい見栄えのある作品です。各すみれはさまざまの生きぬく為の自然環境的要素(地形、地質、温度、湿度)や栽培で鉢の大きさ、礫、砂、肥料、水やり、病虫害の予防、日光、風等、花の咲く条件のクリアー、管理、長年の経験と努力が必要です。以上の事柄を「すみれ達の祭典」では完全にマスターされており、全会員一同、祭賞に推せんしました。

書道部門

奨励賞

けいうんとぶ
「景雲飛」

塩島恭子（相生）



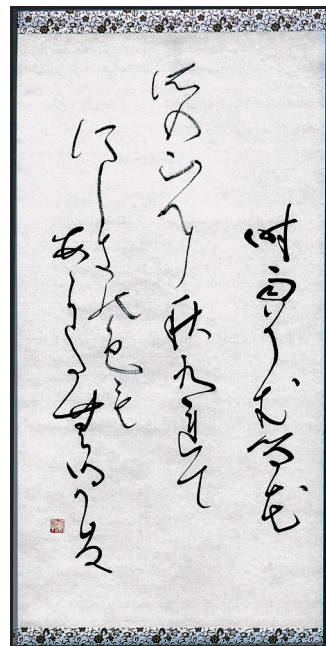
（推薦理由） めでたい雲が空にひるがえるという意味である。筆の太い細いの変化がおもしろく、最後の「飛」が気持ちよさそうに書けている。

文化祭賞



「時雨そむる花その山に
秋くれてにしきの色をあらたむるかな」
さいぎょう
（西行のうた）

沼田ひで子
（伊勢）



（推薦理由） まず、紙面の使い方が上手。半折二分の一にかなを四行におさめ、墨色の変化があり、文字がよく活躍していて楽しい。

奨励賞

りゅう
「龍」

岡本涼歩（太田町）

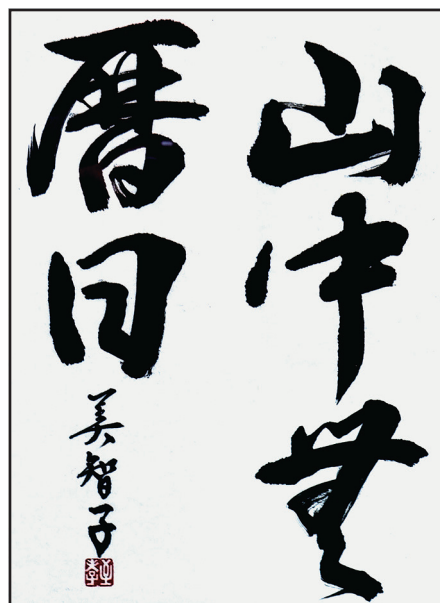


（推薦理由） 半切二分の一に濃墨で表現。紙面を無駄なく躍動感ある連筆で書き上げた。力漲る堂々とした書きぶりである。印の位置も的確で作品を引き締めている。

奨励賞

さんちゅうなしれきじつ
「山中無暦日」

堀井美智子（住吉）



（推薦理由） 流れのある作品、線にも強さがあり筆が活躍している。名前もていねいで、全体にまとまっている。

文化祭賞

渡 辺

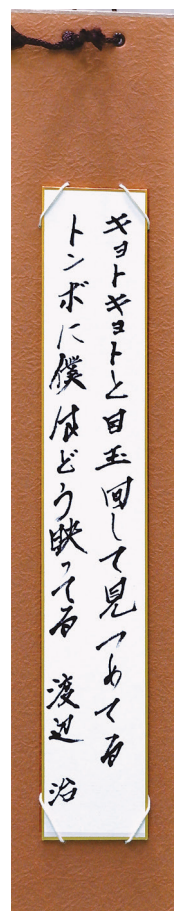
治 (右左口町)



(短歌)

「キョトキョトと目玉回して見つめてる

トンボに僕はとう映ってる」



(推薦理由) こちらからトンボを眺めるのが通常だが、この歌は主体をトンボに置いて、そこから人間である「僕」はどのように映っているのだろうか、と想像をめぐらしている。軽妙な味わいの中に自分を客観するまなざしが生きている。

奨励賞

伊 藤

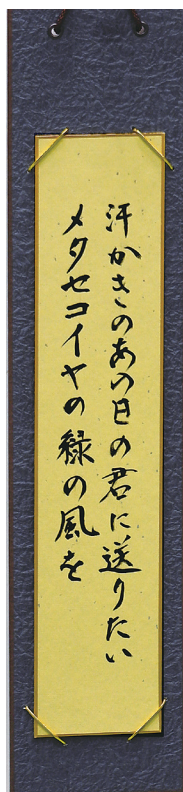
久美子

(小瀬町)

(短歌)

「汗かきのあの日の君に送りたい

メタセコイヤの緑の風を」



(推薦理由) メタセコイヤの木の葉が、薫風に清々しく吹かれて、いかにも涼しそうな午後。「君」は汗かきで、あの日も暑そうに汗を拭っていたね。「あの日の君」がなつかしく甦ってくる、こうしてメタセコイヤの風に吹かれていると。清新な挽歌。

奨励賞

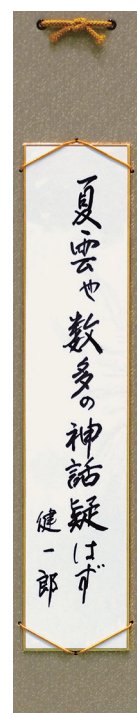
松 村

健一郎

(貢川)

(俳句)

「夏雲や数多の神話疑はず」



(推薦理由) 夏夏、作者は山から湧き上がる積乱雲を眼前に見上げています。積乱雲は、真つ青な空に幾重にも湧き上がり巨大な塊となつて空を覆っています。真つ白な夏雲を見ていると、天地に関わるさまざまな神話が生き生きと蘇ります。天地に満ち渡る夏の生命感を大きく称える一句です。

奨励賞

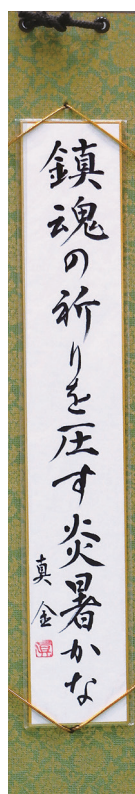
天 野

真 金

(貢川本町)

(俳句)

「鎮魂の祈りを圧す炎暑かな」



(推薦理由) 八月は、太平洋戦争で犠牲になられた三〇万人の方々を追悼し、二度と戦争を起こすことのないよう、恒久平和を誓い希求する月。すなわち、鎮魂の月です。そのひた向きの祈りさえも妨げ、圧迫する炎暑が続きました。しかし、その耐え難い暑さをはねのけ、ひたすら祈り続ける強靱な意思が読み取れます。

奨励賞

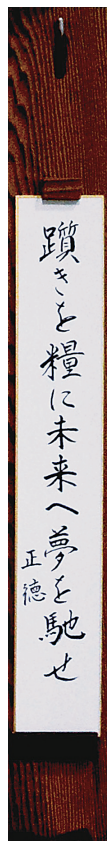
宮 川

正 徳

(東光寺)

(川柳)

「躓きを糧に未来へ夢を馳せ」



(推薦理由) 七転八起の人生の試練を味わいながら人は大成します。宮川さんもおそらく時には泣き、時には落胆を味わいながら奮起なされた事でしょう。躓いた落ち込みを心の糧にして、未来へ夢を馳せる心境が共感を呼び読者に強く訴える、素晴らしい作品に仕上げています。

展示・発表の部

喜びの賞

工芸部門 名執 睦美

記録的な猛暑が続いた今年の夏、秋の涼しさが心地よく、木々が色づき始める美しい季節を迎えました。第五十回甲府市民文化祭が開催され、素晴らしい作品に触れることができ、感動と刺激を受けました。

この度、私の作品が文化祭賞をいただいたことは身に余る光栄と感じ、心から感謝申し上げます。ロマンドール人形に出会い、その美しさに心を奪われ、ロマンドール教室で十数年の月日を重ね、優しくご指導をいただき、この作品をつくり上げることができました。

制作にあたっては粘土が乾きひび割れが入るため、細心の注意を払い緊張感を持って焼き上げました。いくつかの過程をおすごしに作品への愛着が深まり、完成した際の達成感は何ものにも代えがたい喜びでした。

今回の受賞を励みに、今後も技術を磨いていく所存です。そして先生

の教えを大切にしながら精進を重ね、魅力ある作品造りを楽しみながら努力してまいります。本当にありがとうございました。



文化祭を思う

写真部門 広瀬 修

甲府盆地の秋景色、毎年の文化祭は丁度良い紅葉と澄みきった空気の青空と同じ頃の開催でしたが、今年の紅葉は青葉が多く、肌暑い文化祭となりました。各部展示の方は意欲いっぱい作品で、見応えがありました。写真部の展示も良い作品が出ていて次回も楽しみです。ただ今年は、一般と共に高校生の作品を募集したのですが、応募がなく募集の要綱を考えなくてはなりません。

今回は初めて展示部門に高校生の展示があり、見せてもらいました。写真は高校生しか撮れない高校生らしい作品から、ストレートに状況を切り取った写真、演出によって構成された写真までさまざまありました。写真は誰でも撮れますが、その本道は、何かを伝えたいという思いがはっきり表現されているかだと思います。みな素晴らしい若さいっぱいの撮り方で良い参考と勉強になりました。

毎年のことながら全文化祭関係者の協力で、今回も立派な文化祭となりました。

又、次回頑張ります。



賞をいただいて

書道部門 沼田 ひで子

この度は第五十回市民文化祭において栄えある文化祭賞を賜り誠にありがとうございました。

ご指導いただいている宮田先生はじめ、いっしょに練習している皆様、そして家族のお陰と感謝の気持ちで一杯です。

書道を始めた時は、ただただ楽しく過ごしておりました。仮名をはじめ、流麗な線を書きたいと思いますが、線質、行の流れ、墨の濃淡、行間の余白、悩むことばかりです。

今回出品した作品は、半切二分の一に一首書いたものの、墨色の変化と線の強弱が最後までまとまらず、提出期限が迫る中で仕上げた作品であつたため、本当に予期せぬことでした。この感激と賞の重みをかみしめながら、魅力ある作品を目指して精進してまいりたいと思います。誠にありがとうございました。



第五十回市民文化祭

水石展示について

水石部門 水上 強

本年度の文化祭も多くの会員のご協力により、無事終了することができました。

文化祭賞及び奨励賞を受賞されましたお二人については、心よりお祝い申し上げます。今後も、さらなる水石飾りをご期待申し上げます。

文化祭賞 大野浩伸様 梓川産の岩形石の小品ではあるが、諸道具との取り合わせが良い。

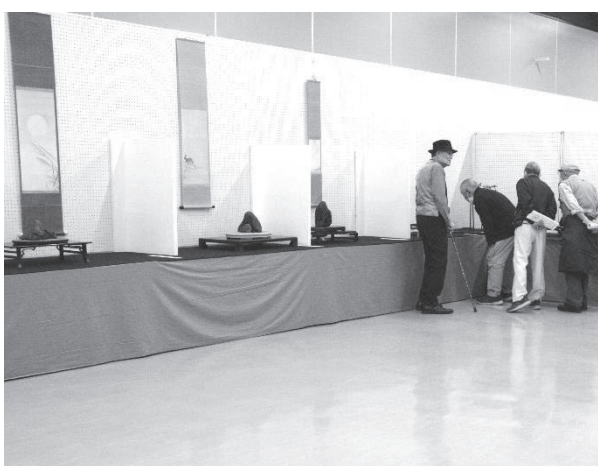
奨励賞 利根川清様 天竜川産の溜り石は、玄人好みの秀石です。

今回の水石飾りは、出品点数(出品者)は、十八点と少なく残念に思いますが、作品はレベルが高く、よって鑑賞者の多くの皆様から、会場全体が整然として、非常に良いとの評価をいただきました。

また、日頃より山梨県愛石会と交流のある近県愛石団体の方々が、水石鑑賞に来甲されました(来甲者七名)。

今回、一般参加で出品されました四名の方については、第四十七回甲府市民文化祭までは、琢美地区文化協会水石部員であり、願わくば、地区水石部の再興に努力されますこ

とをお願いするとともに、文化協会水石部としましても協力する所存です。



第五十回文化祭に寄せて

美術部門 仙洞田 茂雄

私は、今回一般参加で出品をさせていただきました。多くの素晴らしい作品の中で、この度、奨励賞をいただき、大変光栄に存じます。

今回の作品は、東日本大震災の年、多くの人々が一瞬にして大切な人や場所を失い、復興に向け賢明に生きる人々の願いを、一本の桜に例え、制作したものです。しだれ桜の優雅さと儚さ、春の芽吹きや幹には、希望や力強さ、移りゆく日本の四季をテーマに作品名を「めぐる季節に」としました。

私が絵を描くきっかけとなったのは、小学二年生の担任の先生が私の描いた一枚の絵を褒めてくれたことです。それから、私が三十五歳の時、仕事上の悩みを抱える中、何か新しい事に挑戦してみようと考えました。その時、幼い日に褒められた記憶がよみがえり、独学で絵を描き始めて現在に至ります。真っ白いキャンバスに向かい、様々な色を重ねていくことは、自分の生き方にも通じるものがあるように思います。時の流れを感じながら、これからもゆつたりと感性を磨いていけたら幸いです。



第五十回甲府市民文化祭

文学部門 渡辺 治

昨年度から短歌を出品させていただき、奨励賞を、今年は文化祭賞との連絡を受け、一瞬何の事かと状況が把握出来ず、少し経ってから、身に余る光栄と心の震えを覚えました。

私が短歌を始めたのは二〇二〇年四月、ひよんなきっかけから、まさに七十の手習いです。友人に勧められ山日文芸に投稿したところ、掲載されました。反響は大きく、名前が載っているが、君では無いよなどの問い合わせが多く来て、投稿すれば掲載されるものと思っていたのでびっくりしたのが最初でした。それから堰を切った様に言葉が降りてくる様になり、四年で三千首ほどの作品となりました。今回の短歌は、写真を撮っていた時トンボが首を傾げ、大きな目玉で僕を見つめるような仕草を見せた時に詠んだものです。トンボは自然の象徴、僕は今の地球、人類環境破壊、戦争を繰り返している世の中をどんな思いで見つめているのだろうかと三十一文字に託しました。

毎年出品数が少なくなっているとの事です。これを機会に若い人に

興味を持って頂けたらと思っています。



盆栽部の展示を終えて

盆栽部門 今井 千代子

第五十回甲府市民文化祭が「築いた歴史 輝く成果 更に未来に」のテーマで開催されました。そこで、今回私は市民文化活動活性化のための提案を考えてみました。

盆栽部にとって「築いた歴史」とは盆栽部の会員が長年頑張つて植物を育ててきたことです。

「輝く成果」とは、苦労して育てた盆栽等が成果にあつた賞をいただくことで、今年は、文化祭賞には「すみれ達の祭典」が、奨励賞には「米ツツジ」が選ばれました。

「更に未来に」とは、私たちも望んでいるところですが、盆栽部の会員は高齢化が進んでおり、いつ体調を崩してこの素晴らしい趣味をやめなければならぬかわかりません。すでに会員も年々減少しています。

そこで、未来に向かって続けるために、第一に、開花植物は開花時の写真を添えて展示するなど、マンネリ化した展示方法を変えてみる。第二に、他の植物等を育てている会、公民館活動の会などを誘ってみました。どうかと考えてみました。



二〇二四・市民文化祭から

演劇部門 渡辺 政幸

演劇部ステージを支えていただいたキャスト・スタッフの皆様、お疲れさまでした。そして会場にお越しをいただいた皆様ありがとうございました。

演劇部発表会は秋の爽やかな陽ざしの中、芸術ホールで幕を開けることが出来ました。重ねて出演者並びに、ご協力をいただきました皆様方にお礼を申し上げるとともに、最後まで拍手とお声掛けをいただいた会場の方々に厚くお礼を申し上げます。

二〇二四・市民文化祭——演劇部ステージは、身体表現と朗読、マジックの発表舞台として、今年は構成されていきました。

市民が中心となつての朗読グループや、身体表現を目指す物語マジックの普及活動を行っている、山梨マジッククラブの皆さんの力量あるパフォーマンス。それぞれの個性を持った多様なグループの皆さんが、お互いの活動を尊重しあいながら、今回のステージを楽しく盛り上げてくれました。

今年は第五十回の市民文化祭と



いう名目イベントもあり、演劇部としては、劇団創立七十周年を迎えた「劇団やまなみ」の皆様イベント参加をしていただきました。

秋の本公演が終了して直ぐのイベントにもかかわらず、「甲府空襲」という高いテーマ性を芝居に仕上げた劇団員の皆さんに、改めて拍手を送りたいと思います。

「舞台と客席が一緒に楽しめる、気軽なお祭りイベントとしての市民文化祭」演劇部の皆様方、来年もご予約ください。

市民文化祭に参加して

合唱部門 金丸 真美

昨年末加入が認められて、晴れて会員団体として参加いたしましたコア・キルシエです。練習の成果を発表する機会、そして思いを同じにする方々と集える貴重な機会を、多くの時間を割いて企画・運営してくださる役員、実行委員の方々に心より感謝いたします。

本番では、練習とはまた違った独特の緊張感を味わいながらも、その雰囲気を楽しむことができました。普段の練習でも、日本語の歌詞だけでなく、外国語の歌詞においても、その内容を伝えることの大切さを重視し、歌詞に寄り添った表現を追求しています。その成果を本番で発揮したつもりでしたが、講師の先生からも「歌詞の内容を伝える表現力」をさらに深めるようご指摘をいただきました。私たちの課題を第三者に改めて指摘いただけることはとても大切な事だと思います。

これからも団員一同で表現力を磨き、聴いてくださる方々に感動を届けられる演奏を目指していきたいと思っています。
興味のある方、ぜひ一緒に歌ってみませんか。



甲府市民文化祭を終えて

合奏部門 佐藤 幸子

十一月二日、小雨降る中でしたが、合奏部発表、無事に迎えることができました。

ハーモニカ協議会は、六十数名の会員がおりますが、地区の行事などもあり、当日は三十六名余りの参加となりましたが、九月に同じ芸術ホールでも「ふれ愛コンサート」を開催しており、「富士の山」「明日があるさ」「手のひらを太陽に」「高校三年生」の四曲、余裕のある演奏が出来たかと思えます。

当協議会は、四月に大幅に役員改正があり、久しぶりに文協担当になった私ですが、分からないことと多々ありご迷惑をおかけします。

補足ですが、四月に「ハーモニカ・ホップ、ステップ」が文化協会に十名で入会しました。

七名の演奏、しかも初舞台で一番緊張したのは私のようです。みなさん楽しく演奏でき満足した様子でした。

ハーモニカは、若くない人の楽器と思われるがちですが、そんなことはありません。奥の深い楽器です。「お口の中のコンサート」と言ってくくださる方もいらっしゃいます。年齢に



関係なく、興味を持っていただけたらと思っております。



市民文化祭に思う

吟剣詩舞道部門

矢崎 嘉優

吟剣詩舞道部の発表会が十一月九日(土)午後二時三十分から開催されました。

それに先立ち午後一時三十分には役員全員が格技室に集合し、打ち合わせを行いました。山縣清博部長から「今朝窓を開けましたら富士山がきれいに見られて、今日はすばらしい日になると思いました。精一杯頑張ります」と挨拶され、全員の心が一つになりました。手際良く準備が行われ開会を迎え、式典の後直ちに出演となりました。

午前中舞踊部の発表があり、引き続き鑑賞してくださった方もありましたが、残念なことに、十月二十四日にPR活動を市役所一階で開催した成果は感じられませんでした。

しかしながら、今回五十回の市民文化祭のために、文化協会の執行部はいつもの年より多数の企画をされ、大勢の参加を得たものもあり、五十回の節目を飾ることが出来たのは大きな成果であったと思います。

吟剣詩舞道部の皆さんも、会員一

同と一緒に舞台を努めたことの楽しさを味わい、満足出来る日であったと思います。

また、来年もみんなが元気で発表会をやりましようと思を掛け合い帰路に着きました。



お茶会を担当して

茶道部門 依田 宗和

お茶ってなんだかめんどろなことをしているな！まだ二十代の頃、初めて茶道と出会った時の印象です。

あれから五十年以上が経ち、いろいろな茶会を経験してきました。同級生と年に三回程我が家で開く和気あいあいの茶会、お茶を習ったことのない人でも楽しめるよう工夫した茶会、知人を招いたときの茶会等、試行錯誤して参りましたが、今回のような三百人を超える方々の茶会を担当したことは、ほとんどありませんでした。

お茶会に初めて参加する方、もう何十年もお茶をたしなんでいらつしやる方等、皆様に喜んでもらえるにはどうしたら良いか考えていく中で、終わってみれば反省点もありましたが、「良かった」と言ってくださる方もいて安心しました。今回協力してくださったベテランの皆様のおかげだと思っております。

これからも茶道を少しでも多くの方々に、興味をお持ちいただき、愛していただけたらと願っております。



甲府市民文化祭を終えて

能楽部門 佐藤 眞弓

「今年の文化祭には、鑑賞者が多くなると思うので特別企画への出演はどうでしょうか」と勧められました。もっと多くの人に謡曲を親しく聞いていただきたいという思いからそのように決めました。初の企画に不安はありました。が、当日、舞台袖で開会を待つ間、客席を見て、男性方から「おお、こんなにたくさんひとが…」という声があがりました。そして「大きな声で謡おう」と力強い声が聞こえてきました。顔も何か輝いているように見えました。良い決断だったのかな！とホッとしたものです。

先日、家族の方にそっと客席で撮っていたいただいた動画を見せていただくと、皆さん大きな声でしっかりと謡っておられました。「良かったナ」の一言です。

当日、最後までとおして発表を見て、この様な形は、普段あまり繋がりのない、各部の活動の様子の子の全体が理解出来る機会であり、今後も続けて行けたら良い形なのではないかと思われました。



第五十回市民文化祭に 想いを込めて

舞踊部門 保坂 とみ子

今年の夏は今までになく猛暑が続く中、さわやかな秋の訪れと共に第五十回市民文化祭を迎え、十一月二日(土)に開幕式が行われました。舞踊部の発表は十一月九日(土)十時より開催され、小学生の子どもから高齢の方まで一〇五名により二十二曲発表いたしました。昨年よりお客様は少なかつたように思いますが、記念すべき年に発表できましたことに感謝しております。また、十一月十七日(日)には特別企画「甲府の春夏秋冬そして未来へ」に舞踊部も参加いたしました。

それぞれの地区の文化祭と重なったこともあり大変でしたが、皆様方のご協力をいただき無事に終わることができ、感謝しております。これからも、人と人とのふれあいを大切に、舞踊を続けられますよう精進して参ります。



第五十回記念文化祭 を終えて

邦楽部門 上田 真帆

十一月四日、午前は大正琴の部、午後は三曲の部と二十一団体一八〇名が参加しました。毎年多くの地区文化協会の団体の参加もあり、地道な活動がうかがえます。学生、外国の方の参加もあり、これからも日本の伝統文化音楽を広げていきたいと思えます。演奏曲は「ゴッドファーザー 愛のテーマ」「昴」「大阪しぐれ」「六段の調」「武田節」など多彩で、皆さんに喜んでいただけたのではないのでしょうか。

文化祭の稽古と並行して、発表部門の特別企画の演奏曲「武田節」を大正琴、尺八、長唄三味線、箏の代表者で練習をかさねました。最近はこのような機会がなかったのですが、皆さんと今回いろいろなお話をすることができました。久しぶりの反省会では来年も合同曲をプログラムに入れてはとの提案がありました。他の専門部の演技もすばらしく第五十回文化祭は大成功だったと感じました。



市民文化祭を終えて

民謡部門 相川 宝楽

私達民謡部の発表日は、十一月十七日、専門部発表部門の最終日でした。昨年と違いプログラムとチラシが充分に配布出来ましたので、観客のお客様も昨年より多く安心しました。

昨今民謡を習う人たちがずいぶん少なくなつて参りました。昭和の時代、カラオケやゲーム等娯楽も少なかった頃は民謡人口も多く、各教室共多くの生徒で賑わった時代がありました。

しかし、時代は変わり多くの娯楽があり、また音楽の変化もあり、労働歌やお座敷用などの出番がなくなり、今の若者は民謡を知らない世代です。

現在音楽では、テンポやリズムも多様化しており、緩やかな民謡リズムが若者には馴染みません。歌詞にしても縄文弥生時代から続いている五七調ではなく、語り言葉のままの文節でつくられているため、伝統的な日本のメロディーには馴染みません。日本にはオノマトペと言って、雨シトシトやザーザー、風はそよそよ、ビュービュー等で字数を調整しています。従

って私たちが三味線や唄で表現しづらい時代です。

そんな現代に民謡もどう対処して行けばよいのか模索中です。一つの解決は、洋楽のリズムを取り入れて作曲するのも方法かなと思います。例えば私が作詞作曲した「甲州ブギウギ音頭」等、今後に向かって取り組んで行きたいと思っています。



第五十回甲府市民 文化祭を終えて

洋舞部門 中村 元子

十一月十六日(土)に我々洋舞部の発表が行われました。

五十回という記念すべき機会に参加できたことに、これまでに先輩である諸先生方が培われたご尽力に感謝すると同時に、文化面においても変革期にある中で現状を維持させていくことの大変さと、尚かつ発展させていくことの困難な現状の打開など、たくさんの課題を見いだせたように思います。今回は、久々に四件の公募作品が加わり、部門作品を含めそれぞれのスタジオの個性ある素晴らしい作品が発表されました。今後、このようにたくさんの力を結集し、洋舞部門を盛り立てて行くことが出来たらと、部門の持続の可能性に僅かながらも光を感じた、良い機会であったと思います。



客力は強く、今回も五百余の入場者を得、舞台と観客が一つとなった迫りある楽しい第五十回の舞台でありました。部門の一員として自負しております。



第五十回甲府市民 文化祭を終えて

華道部門 小林 明美

第五十回の節目の文化祭を迎え、華道部も伝統を継承しつつ、未来への希望が膨らむような展示ができたかと幹事会で相談を重ねてまいりました。二日前の設営作業では、背面の布を業者の協力のもと丁寧に貼っていただき、広くきれいな展示スペースを作ることができました。

出瓶者は専門部十流派二十九名、地区文協は五地区十二名。前日午後からいけ込みを行い、思い思いの花材を使い、秋の実物あり紅葉ありと、どれも思いのこもった生き生きとした作品が並びました。

初めてみる花材に足を止め、花材表で名前を確認している方、一作品一作品じっくりと見ている方、「とても素晴らしいですね。癒される空間でした」と嬉しいお声もいただきました。

年々出瓶者の数が減少していく中、今後の課題もみえてきた節目の文化祭となりましたが、花との出会い、会員の皆様との出会いに感謝しながら、これからも稽古に励み、華道の魅力を伝えていきたい

したいと思います。
ご協力いただきました関係者の皆様、本当にありがとうございました。



青少年作品展を終えて

青少年作品部門

小林 和仁

青少年作品展は、文化活動を担う次世代の育成を目指して開催される甲府市民文化祭の一環として、青少年育成甲府市民会議が募集した「家庭の日（毎月第一日曜日）」と、「青少年を育む日（毎月第三日曜日）」の啓発作品の展示を通して、参加させていただいております。

本年度は十一月九日・十日に総合市民会館の二階展示室で開催し、甲府市内の小・中学校や各地区から応募いただいた作文、ポスター、標語の作品三三九五点の中から、一三五点の入賞作品を展示いたしました。

入賞された皆さんとそのご家族を中心に、二日間で約四五〇人の方が来場され、作品一つ一つを丁寧に鑑賞されていました。また、三世代でのご来場も多く、入賞作品を前にして一緒に写真を撮ったり、うれしそうに家族に説明したりと、笑顔いっぱいの中で、展示室は温かい雰囲気包まれていました。

この青少年作品展が、文化の継承とともに、明るい家庭づくりや青少年の健全育成の一助となることを願っております。



甲府市民文化祭

将棋大会について

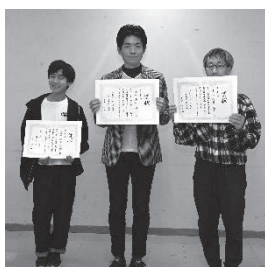
清野 隆彦

令和六年十一月九日の土曜日に、リッチダイヤモンド総合市民会館三階大会議室において、第一回甲府市文化協会会長杯 将棋大会が行われました。初級者の部から高段者の部まで計四クラスに合計四十八名の参加があり、付き添いの父兄の皆様等をあわせると八十名以上の方がお見えになり、大盛況のうちに終わりました。

子どもからお年寄りまで幅広い世代の方が参加し、中でも八十代で将棋を始めた方が初級者の部で活躍されましたのは素晴らしいことです。

大会は各クラスで予選が行われた後、通過者による決勝トーナメントで熱戦が繰り広げられました。成績については次のとおりです。

- ▽高段者の部（優勝）東山洋一、（準優勝）野澤勇翔、（三位）杉野忠夫
- ▽有段者の部（優勝）稲垣 聡、（準優勝）安田和幸、（三位）中村秀樹
- ▽級位者の部（優勝）此田悠作、（準優勝）新城幸志朗、（三位）安齋成也
- ▽初級者の部（優勝）齋藤 新、（準優勝）向 志暢、（三位）田中正純

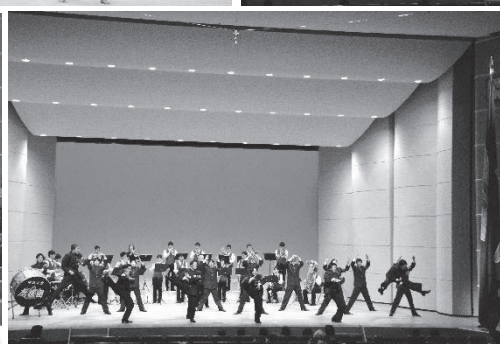


高校生の部 今年は展示も発表も！

事務局

高校生は忙しい！わかつてはいるけれど、昨年度、目の当たりにした素晴らしい発表が記憶に鮮明で、記念すべき第五十回のファイナレは、高校生にこそ飾ってほしい。そんな思いに、先生方にもご尽力いただき、今年は発表に加え展示部門への出品も実現していただきました。写真、イラスト、書道、華道、建築模型がずらりと並び、また、発表部門では、演劇部が初登場。新たなページが開かれました。

観客も共に楽しもうと配慮されたステージは大人顔負け、感銘を受ける一方、展示作品からは等身大の高校生の姿が見えてくる気がしました。どちらもエネルギーに満ち満ちていますが、展示が加わり、昨年度とは少し異なる感動がありました。



大学生・社会人の部

きらぼし 綺羅星たちの音楽会

事務局

「生きているってリアルに感じることができるのは、表現しているとき。」これはある舞踊家の言葉だったように記憶しています。今日、多様な文化・芸術活動が存在しますが、大学に通いながら、働きながら、どんなに忙しくとも、自らの意思で何かを続ける、追求する理由は、深掘りすれば、そういうことかもしれません。

記念すべき第一回大学生・社会人の部。参加者は四十六名。ダンス、吹奏楽、軽音楽、音楽にピアノ、なんとチューバのソロまで聴くことができました。曲目もポップスからヨーロッパの民謡、クラシックにオペラなど多岐にわたり、ラストはバスソリストによる「見上げてごらん夜の星を」、アンコールに「赤とんぼ」が歌われました。山梨県内で学ぶ大学生から、山梨県出身で、今は、全国様々な舞台に立っているプロの方まで、誇張なく、かなり贅沢なステージでした。大学生・社会人の部のサブタイトル「綺羅星」の名の通り、個性ある皆様の輝ける姿に、今後一層のご活躍を期



待せずにはいられない夜の「音楽会」となりました。
最後に、合唱指導者である依田浩先生、音楽家の坂本響様、各大学学生課の方々には、多大なるご協力をいただきました。誠にありがとうございました。

発表部門特別企画 「甲府の春夏秋冬 そして未来へ」

事務局

第五十回甲府市民文化祭を記念し、今年度は市文化協会の展示及び発表部門を柱に、さまざまな企画を実施しました。その一つが、発表十部門がリレー形式で甲府の四季を表現し、積み重ねた歴史と未来を子どもたちに託すまでの物語。

舞台は、私たちの街・甲府。

季節は春、能楽部の「鶴亀」など祝の謡でスタートし、桜の季節、茶道部では「和敬清寂」、もてなしの茶会が催され、続いて邦楽部奏でる郷土の民謡「武田節」では、曲に合わせて口ずさむ声が、客席のどこからともなく聞こえてきて…。

夏、舞台は一転、演劇部による七夕空襲の物語に、戦争の悲しさを思い起こした方も少なくなく…。

それでも季節は巡ります。民謡部の調べと舞踊部の踊りのコラボレーションで、秋の収穫とともに祝う喜びが舞台に広がり、続く吟剣詩舞道部は、「秋の月」を独自の世界観で表現しました。

冬、マンドリン（合奏部）の透明感ある音色が、寒くとも心躍る季節

へ聴く人をいざなうて…。

再び春。洋舞部（バレエ）の子どもたちの可憐な踊りに惜しみない拍手が送られ、続く合唱部による甲府市制百周年を記念した交響組曲「遙かなる時を超えて」では、甲府の明るい未来を願う歌声が会場に響きました。

未来を担う子どもたちの代表として、甲府市立大国小学校四年生の六名が、「甲府ラーニング・スピーチ」を行い、大国のまちについて学んだことや、一人ひとりの夢と未来を語ってくれました。

フィナーレでは「甲府市の歌」を舞台と客席一体となって合唱。

約三時間の舞台の出演者は二七二名。全ての発表部門が参加し、ひとつの物語を紡ぐためには、関わる全ての方たち、とりわけ各専門部長さんのご尽力が不可欠でした。また、物語の原案（詩）を作ってくださった数野徳子文化協会副会長、ご多忙の中、ナレーションを快く引き受けてくださったフリーアナウンサー山形由紀子様、舞台進行の準備段階から関わってくださった遠山忍合奏部長及び合奏部の皆様、舞台スタッフの皆様に、この場をお借りし、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

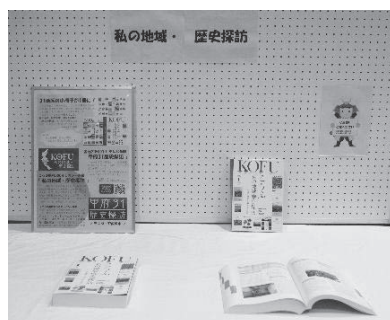




開 幕 式

令和六年十一月二日
山の都アリーナ入口にて

五十回を記念し、開幕式は、茶道部による呈茶、合唱部による「甲府市の歌」でスタートしました。



令和六年十一月二日～四日
山の都アリーナにて展示

私 の 地 域 ・ 歴 史 探 訪



☆表彰式
令和六年十一月二十八日
甲府市役所四階大会議室にて
☆受賞作品展
十一月二十六日～二十八日
甲府市役所一階市民活動室にて

表 彰 式 ・ 受 賞 作 品 展



令和六年度 定期総会

五月二十七日、定期総会を開催しました。

新旧年度の予算・決算・事業計画・事業報告・補欠役員が承認されるとともに、長年本協会の発展に寄与された皆様のご功績に対し、感謝状が贈呈されました。役員は、最終頁に記載のとおりです。

市民文化団体、各地区文化協会が気持ちをひとつに、行政との連携をさらに強化しながら、本市の郷土文化の振興と芸術文化水準の向上、会員相互の交流・協調を図っていくことが確認されました。

日時

令和六年五月二十七日(月)
午後一時三十分～

会場

リッチダイヤモンド

芸術ホール

総合市民会館

アトラクション

午後一時三十分～

合唱部

出席者 二五〇名



文化講演会

テーマ「城下町甲府の成り立ちを探る」

甲府市文化協会では、会員

はもとより市民の文化意識

の高揚を図り、文化芸術への

認識をより深め、今後の文化

活動の一助としていただく

文化講演会を、毎年度、一年

の初めに実施しています。

本年度は、甲府市歴史文化

交流施設「こうふ亀屋座」の

オープンを記念し、城下町甲

府の成り立ちを、考古学の視

点も踏まえて伺いました。最

後に、歴史や文化を活かした

魅力的なまちづくりについ

て、さまざまな事例とともに

ご提言いただきました。

講師

佐々木 満氏

甲府市教育委員会

歴史文化財課

信玄ミュージアム前館長

開催日時

令和七年一月三十一日(金)

午後一時三十分～午後三時

会場

リッチダイヤモンド

総合市民会館

芸術ホール

アトラクション

舞踊部

出席者

二三〇名



令和七年度

甲府市文化協会

行事カレンダー

甲府市民文化祭

十一月一日(土)～

二十三日(日・祝)予定

文化講演会

令和八年一月末

………

甲府市文化協会の
情報はこちらから

◎甲府市文化協会

ホームページ

<https://kofu-bunkyo.com>



◎甲府市文化協会

フェイスブック



甲府市文化協会の最新情報
や画像を配信しています。
スマートフォンで右のQR
コードを読み込んで、ぜひ
ご覧ください。

令和六年度 甲府市文化協会 顧問・役員氏名

吟剣詩舞道	筆頭副会長（専門部）	副会長（専門部）	副会長（地区文協）	伊勢・住吉	池田	東原	羽黒	副会長（生涯学習室）	理事（専門部）	華道	工芸	写真	書道	水道	美術	文学	盆栽	演劇	合唱	吟剣詩舞道	茶道	能楽	舞踊	邦楽	民謡	洋舞	
矢崎	鶴田	奥山	数野	森田	松澤	原野	山下	依田	小林	石川	石川	広瀬	矢崎	水上	松七五三	河野	小泉	渡辺	岡田	遠山	山縣	石戸	佐藤	保坂	相川	深沢	
吼隆	一雅	幾代子	徳子	芳弘	榮二	五郎	知郎	歩	明美	修	美咲	美咲	美咲	美咲	美和	一朗	幸郎	政幸	恭子	清忍	宗博	眞弓	とみ子	瞳	由美		
大里	石田	千代田	里垣	貢川	相川	国母	山崎	穴切	玉諸	新紘	湯坂	朝服	富士	相生	春日	甲運	大新	北田	新道	中道	理事（生涯学習課）	監事	専門部	地区文化協会	教育総室長	事務局	事務局
高橋	吉澤	畑	末木	福田	安部	日向	小川	藤坂	山崎	戸野	山本	坂田	立川	雨宮	清水	寺田	篠原	大久保	大久保	久保寺	樋田	笠井	丸山	岡部	早川	大塚	
要	一夫	晴久	照子	勝太	龍夫	靖夫	フキ子	勝人	清茂	清茂	尚雅	尚雅	尚雅	尚雅	義彦	妙朗	敏朗	はるみ	威徳	威徳	和子	公巳	文雄	秀文	友美	友美	

甲府市文化協会に 参加しませんか!!

本協会は、市民文化団体、各地区文化協会の連絡協調を保ち、自主的な文化活動を助長し、郷土文化の振興と甲府市の文化水準の向上を図ることを目的としています。現在は、十八専門部と、二十七地区文化協会が、学習と研鑽を積み重ね活発に活動しています。

専門部は、各分野に精通した同じ目的をもった団体(者)が集まり、自主的な芸術(創造)文化活動を継続して行っています。

地区文化協会は、市内の小学校地区に設立され、生活文化活動を通じて、住民相互の親睦と交流を図るとともに、学校と連携・結びつきを深め、地域の活性化を図っています。文化活動に興味のある方、学習したい方、一緒に活動しませんか。

お問い合わせ先

甲府市文化協会事務局

Tel 055(223)7329
Fax 055(235)5648

✉ info@kofu-bunkyo.com

あとがき

少子高齢化の波は、益々高くなる現状の中、各文化協会の会員数減少も、推して知るべしで、苦慮共有の問題点ですが、私の所属する国母地区文化協会は、今期の文化祭展示部門において、会員以外の作品公募を口コミ中心に実施し、趣味を持ついわゆる「潜在文化人」ともいえる人の掘り起こしを行った結果、なんと三十名近い出品者を得て、展示会場の四分の一を占めました。物語風の創作人形、書、絵画をはじめ、陶芸、彫刻等多種に亘り、見応えのあるものばかりでした。

このように、参加者が増えることにより、必然的に入場者も増加する相乗効果が生まれます。

来期も「潜在文化人」の掘り起こしを行い、文化祭への参加に繋げていくよう、粘り強く続けていきたいと、協会員一同、結束を固めています。その中から、入会者の増えることを念じながら。

編集委員長 渡辺 優

【表紙の題字】

書道部長 矢崎美咲

【表紙の写真説明】

舞鶴公園から写した写真は、完成間近の「こつふ亀屋座」と、旧岡島百貨店解体のため空高く伸びた重機など、甲府の街が大きく変わっていく姿をとらえています。

甲府の歴史文化を継承し、新たな扉を「拓く」この施設は、令和七年四月に開業を控え、左上に写る桜のつぼみは、満開のそのときを待っているかのようです。

写真部長 広瀬 修

【編集委員会】

委員長	渡辺 優
副委員長	河野 一郎
委員	矢崎 吼隆
同	奥山 幾代子
同	森田 芳弘
同	松澤 榮二
同	広瀬 修
同	矢崎 美咲

(順不同)

お手元へ配布された機関誌は、大勢の方にご覧いただけるように、会員・友人知人等へお配りください。

令和七年三月一日発行